凍った川面に点々と
釣り糸を垂れる男達
岸辺の化粧柳のにぶい赤色が
春が近づいていることを報せている

青空が一転し
灰色の広い空から
雨まじりの雪

積もった雪の間には麦の緑
梢の枝にはわずか黄色の新芽
寒さの中でも
新しい息吹きが感じられる

冷たい無彩色から
あたりの色合いを変えていくのは
ささやかな一つひとつの命

チェルノブイリ

第 91 次訪問団報告

ゴメリ：放射線医学人間環境センター　小児血液病棟

何が始まるんだろう。
最初はこわばっていた表情が、いつの間にか日本のお話にひきこまれていった。
そして、新聞で折った兜をかぶり、クルクルまるめて棒にした剣を振り回す頃には、プレイルームの空気はすっかり和んでいた。

グランドゼロ GROUND ZERO JCF 79春

目　次

チェルノブイリ
第 91 次訪問団報告

もはや原発事故後ではない？　＜廣浦学＞　7
ベラルーシ渡航報告　＜山本伸一＞　9

平和を祈るコチさんからのメッセージ

イラク戦争から 6 年　＜加藤丈典＞　20
限りなき義理の愛大作戦 ‘09 を終えて　＜佐藤真紀＞　24
イラクと駒ヶ根とチョコのはなし　＜西村陽子＞　27
赤穂高校に温かい空気が流れたとき　＜野口操＞　30
ご支援に感謝、感謝、感謝。　＜鎌田實＞　32
あったかい心は、ブーメラン！　＜谷田部裕子＞　38
信州大学医学部附属病院コンサートに参加して　＜小祝さくらこ＞40

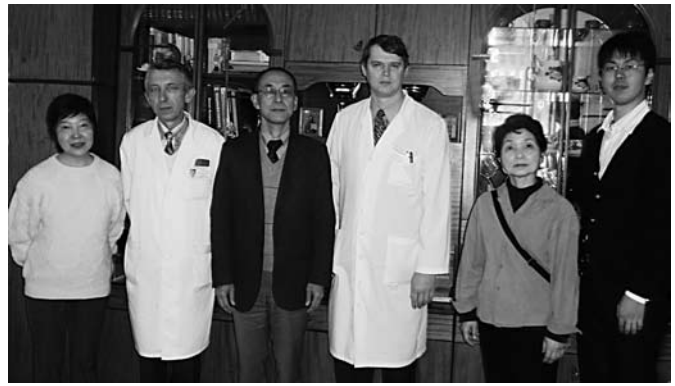
連載＆お知らせ

イラク人医師 Dr.Likaa の JICA 長期研修プログラム参加にあたって　＜勝亦菜穂子＞42
出会い　Встреча　44
連載随筆「クオリティ・オブ・ライフ」　＜宮尾彰＞　54
ベラルーシの食卓　56
モスクワ便り　57
ロシア小話　58
振替用紙のメッセージから　60
ありがとうございました！　63
がんばらないレーベルＣＤ　66
ＪＣＦオリジナル鞄　67
Здравствуйте！（事務局広場）　68
カルチャーレビュー　70
インフォメーション　73

表紙写真提供：マキシム・ニコラエフ

第91次訪問団報告

ベラルーシの現場を確認して今後の支援のあり方を協議



3月21日～29日、第91次訪問団がベラルーシを訪れた。メンバーは、廣浦学さん、山本伸一さん、力丸邦子さん、事務局から神谷が参加した。

ゴメリ州立病院付属産院へ経膣用プローブを持参した。産院のスベトラーナ院長は、「夢のようだわ」と言って喜んでくれた。JCFが、支援したエコー（超音波診断装置）も大いに使われており、更に胎児の正確な検査が期待できる。

ベトカ地区病院でも、ホルモン検査機購入の手続きが進んでいる。「ナジェージダ2008」で、皆さんから協力していただいた支援が形になって、現地の病院で活かされていきます。

また、今回の訪問は、これまで支援した医療機器の稼動状況を調査し、今後の支援のあり方を現地担当者と話し合うことが目的だった。ベラルーシの社会状態は、めざましく良くなって、病院の設備はあっという間に整ってきた。それを踏まえたうえで、今後どのような協力関係ができるかを話し合った。

また、力丸さんはそれぞれの病院で、入院している子どもたちに絵本の読み聞かせと、折り紙の風車をプレゼントして喜んでもらった。

（事務局・神谷）

もはや原発事故後ではない？

廣浦　学（東海医療科学専門学校・臨床工学科長　JCF理事）

訪問病院

ゴメリ州立病院

ゴメリ州立病院付属産院

ゴメリ州立がんセンター

国立放射線医学環境センター

チェチェルスク地区病院

ベトカ地区病院

モロゼチノ地区病院

総括

『もはや戦後ではない！』流に言うなら、〝もはや原発事故後ではない？〟そのチェルノブイリ原発事故を準えてタイトルとしてみました。

チェルノブイリ原発事故から20年以上が経ちました。原発事故とは別にベラルーシ共和国のその後の発展と並行して訪問先の病院や町並みの変化について今回の渡航報告をします。

私が最初に訪問した1996年頃はツーリストホテルの正面玄関ドアは古めかしい木製ドアでした。部屋の窓には隙間のある作りでした。当時は吹き込む冷気に吐く息が白くなりガムテープで目張りをして修繕した記憶があります。現在では欧風の二重窓に改装されロビーもお洒落な感じで昔の面影すらありません。

当時、備え付けのテレビは殆んど映らず、番組も古い映画などでした。今では約40チャンネルを有し、すべて映ります。英語の番組に耳を寄せるのは私だけでしょうか。電話事情も改善し部屋から国際電話も普通に掛けられます。そしてインターネットも完備され有料ながらネットでメールを確認できることには驚きを隠せませんでした。

訪問先病院でも同じように正面玄関は木製ドアから改装され確実に病院環境は改善されつつあります。町並みも以前は白黒の世界を思い浮かべるような暗さと、何となく重苦しい感じを持っていました。季節によりますが今では並木道には花々が植えられ、すれ違う人々にはどこか明るささえ感じます。ヨーロッパからの物流がベラルーシ国内にも押し寄せ、電化製品も食料品も豊かに感じます。ホテルでの食事も当時とは比べ物になりません。

訪問した各病院でも設備の改装・新規購入が進み医療機器類も、以前より格段に進歩した装置が導入されています。この国の医療予算配分は確実に着実に改善され、住民への貢献は進みつ

つあるのではないでしょうか。

日本では昭和31年度の『経済白書』から、『もはや戦後ではない』という言葉が流行語になりました。『もはや戦後ではない』という言葉は、「もう暗い状況は脱した！」とか「戦後復興を遂げた！」という意味で受け取られることが多いと思います。

ゴメリ州立病院産院で機器のメンテナンスをする廣浦さん

その白書には、「戦後復興を通じての経済の成長は終わった。国民所得や技術革新からみても、もはや戦後ではない」と書かれていたそうです。

私は原発事故を当時の戦争に例えて一つの時代の区切りとして戦前・戦中・戦後という区分をしてみました。

ある説によると『「戦後」に、戦争による混乱を抜けきっていない時代という意味合いを持たせ、また終わりを設けず現在までを含める』そうです。

しかし原発事故を通じ現地で被災された方々には戦後という言葉は無く、後遺症に悩む日々が続くことには変わりはありません。人類史上未曾有の事故を繰り返さないために、何ができるのか？　それを考え続けるのが、ＪＣＦを含めチェルノブイリに関る人たちの役目であると感じます。引き続き現地の人達との交流を続け、その時代の証人として後世へ伝えていくことが大切です。

医療支援活動では物理的支援（医療器材支援等）は既に終焉を迎えつつあることは事実です。確実にベラルーシは豊かになっています。今後必要とするのはソフト面でしょう。人的交流を始め原発事故を風化させないための情報交換などに積極的に取り組むべきではないでしょうか？

政治問題も経済問題も国際問題も…いろいろな問題を抱えるベラルーシでも、原発事故の記憶は少しずつ忘れられています。

〝もはや原発事故後ではない？〟というタイトルは渡航先で感じた小生自身の印象なのです。

ベラルーシ渡航報告

山本　伸一
（東海医療科学専門学校臨床工学科・学生）

モロデチノ病院副院長（左）山本さん（中）ラボの医師（右）

◆はじめに

今回の訪問では、ＪＣＦが長年にわたって行ってきた医療機器の供与に対するその使用調査を行いました。また、病院の代表者と面会し、今後の支援のあり方について、ベラルーシ政府や病院の状況を交えながら対談しました。ベラルーシでは、各病院に共通する医療機器における新しいルールが制定され、我々はそれに則って支援することが必要になりました。まず、昨今の病院の実情とともに説明します。

◆医療機器の新ルール

ＪＣＦでは、過去に中古または新古の医療機器を供与し、そのセットアップや修理を行ってきました。しかし、２００８年11月よりベラルーシ共和国で医療機器に関する新しいルールが始まり、新品または製造後５年以内のものでないと、医療機器として登録できなくなりました。また、海外から医療機器を持ち込むにあたって、製造年の縛りとともに保健省の定めるリストに無い医療機器は登録ができません。保守メンテナンスは、ベラルーシの企業が行っており、このリストのものでないと、保守サービスを受けられないということらしいです。

各病院は、昨年または一昨年にベラルーシ政府保健省から、医療機器購入のための資金を受けており、各病院はそれぞれ必要な機械を購入していました。しかし、台数はまだ十分には足りず、これからも更なる支援が必要であると言っています。

各病院には、医療機器を担当するエンジニアがいますが、彼らの仕事は登

録や統計処理をすることがほとんどで、実際の修理や保守メンテナンスは、ベラルーシ国内の企業に委託して行われています。

◆病院訪問

以下、各病院において対談した内容と所感をまとめます。

◎ゴメリ州立病院　カシム院長

・最近、保健省から新しい機器の供給や、購入資金の提供を受け機器を増やしました。
・以前ＪＣＦから供与された機器は古くなり、一部処分したものもあります。
・今後しばらくは、機器購入のための資金はもらえません。
・ＭＲＩと麻酔器を購入したいと思っています。現在使用しているベラルーシ製の麻酔器は、重篤な患者が集まる州立病院には対応しきれていません。
・日本における医師の研修は大変ありがたいと思っています。
・医療機器の保守メンテナンスについては特に問題は無く、メーカーに修理委託しています。
・現在、故障のある機器はありません。
・これからＮＩＣＵ（新生児集中治療室）をつくっていきたいと思いますが、予算はまだ組んでおりません。

エコーが効率よく使われている

◎ゴメリ州立病院　付属産院　スベトラーダ医師、セルゲイ医師

・ここの産院は、母体に何らかの異常を持った妊婦が多く、ベラルーシ製の麻酔器はそのような患者には対応しきれていないと思っています。より良い麻酔器の購入を望んでいます。

未熟児用保育器

・今必要な機械は、麻酔器と分娩監視モニタです。
・年間８００例の分娩を扱っており、保育器が足りません。
・供与した生化学分析器の状態はよく重宝しています。供給品がそろそろ底を尽きるので日本からの供給を望んでいます。
・ＪＣＦより供与されたエコーの状態は大変よく、今も現役で頻繁に使われています。
・サチュレーションモニタ（酸素飽和度計）もしっかり利用しています。
・現在の新しい建物は、２００８年の６月から使用しており、中央配管により管理された医療ガスやタイル張りの医用室を備えた、衛生的な建物です。
・政府からの援助で購入した保育器は、Drager製のクオリティの高いものです。

―所感―

この新しい病院は新築ということもあり、大変きれいな建物です。過去にＪＣＦから供与した機器は大切に使われており、新しい機器においても操作者に制限を設け大切に使用しています。医療ガスの中央配管は壁を這っていますが、メンテナンスや建築のコストを考えると、このように設置したことはベストな選択だと思います。

医療機器はかなり充実していますが、細かいところに目を向けると、いくつかの機器が古いもので、支援が必要なように感じます。しかし、基金の趣旨を考えた場合どこまで支援するべきか考えさせられます。

分娩監視装置は大変古く台数も足りていませんが、麻酔器のような機器は新薬の利用などによって対処できるところもあり、経費との兼ね合いから十分に議論する必要があります。その他に支援が必要と思われるものは、サチュレーションのプローブなどの壊れやすく高価な消耗品の供与であると思います。今回、エコーの経膣用プローブを供与したことから、彼らがより高度な治療ができるようになることを望みます。

◎州立がんセンター　ウラジミール医師

・患者が多く、毎日18時までしっかり治療をしています。ここでは、がん患者のみを扱っています。
・現在、ゴメリ州における小児の甲状腺がん患者はおらず、大人の甲状腺がんの対応をしています。
・ここには、西ロシアから来る患者もいます。
・週に12～16件の手術を行っています。
・現在ほかの団体からの支援は無く、ＪＣＦからの支援を受けたいと思います。

・ここには、専門的な情報が足らず、新しい情報を求めています。
・日本のエンジニアとの係わり合いの可能性として、機器展（Expo）に一緒に行ってもらい、購入に関するアドバイスを受けるなどの手段があるでしょう。
・以前供与を受けたものは大変良い機械であり、大変重宝しました。

麻酔器　２年前に故障し、現在はロシア製のものを使っている。
無影灯　カバーにひびが入っているが、問題なく使用している。
手術台　問題なく動いている
電気メス　ピンセット式の物なので、主にピンセットとして使用している。

◎チェチェルスク地区病院

・昨年新しい院長が就任しました。
・老人の割合が人口の20％を占めており、地区の高齢化が問題になっています。
・病院にエンジニアがいて、メーカーとのやり取りをしており、修理の面でのサポートは現在必要ありません。毎月、保守に関するエンジニアが来院しています。
・機器の供与は依然必要としており、消耗品、電解質計、生化学分析器、無影灯、内視鏡などを必要としています。

チェチェルスク地区病院検査室血球計算器

・ＪＣＦから供与された検査室の２台のセルカウンターは現在も現役で稼動しており、一日に約１２０件の検体を処理しています。ここの検査室は医師が管理しています。
・内視鏡は重要な治療手段であり、現在２ヶ月のウェイティング状態です。機器の不足に加え、検査に対し洗浄の手間がかかるため、機器の購入を必要としています。
・２つの手術室に対し、無影灯が一つしかありません。しかし、新しい手術室が夏過ぎに完成します。
・ＪＣＦからの資金供与により購入した韓国製のエコーは、３Ｄに対応した大変性能の良いものです。
・現在病院には孤児院の患者はいませんが、病気になったときに適宜病院を訪れています。
・若い人は街に出てしまい、老人ホームには15人のお年寄りがいます。放射線の被害にあったのは子ども達だけではなく、年寄りも同じと考えており、今後はホスピスを建設する必要があると思っています。また、機器の支援だけでなく、教育プログラムのような形での関係も今後の可能性として考えます。

昨年支援したエコー

・小児病棟にて力丸さんによる絵本の読み聞かせ。

―所感―

院長が変わったことにより、ＪＣＦは新たな関係を築く必要があると感じました。建物内は蛍光灯の数も少なく、補修の必要を感じる箇所がところどころにあります。必要な最低限の医療機器はそろっています。しかし、内視鏡においてはたくさんの患者の検査をするためにはあまりにも数が足りない状況です。内視鏡はある程度大人の患者に使われるため、基金の趣旨も考慮しながら支援について考える必要があります。

◎ベトカ地区病院

・ホルモン検査器の購入資金の支援を受けています。院長は、せっかく貰ったお金であるため、より良いものを買いたいと、ディーラ側と交渉中です。ベラルーシ製で無く外国製のクオリティの高いものを買いたいと思っています。
・近いうちに新しいモデルが出るため、それを待って購入に踏み切ります。３ヶ月以内にオーダーする予定です。
・州立病院に充実しているような保育器は、ここには数台しかありません。人口規模的に、もう数台必要であると思っています。
・過去にサポートを受けた機器は全て順調に動いており、今後ともぜひＪＣＦからのサポートを受けたいと考えています。
・胃がんの患者が増えており、検査のための内視鏡の数が足りていません。また、洗浄に時間がかかるため専用の洗浄器を望んでいます。

ベトカ地区病院ナージャ先生と話し合う

・レントゲンの印刷機が必要です。今は大変時間がかかります。
・よい滅菌器も望みます。
・このベトカ地区には、現在でも40キュリーを越える高濃度汚染地域があり、放射線の飛散はたくさんの影響を人間に与えています。
・病院医師は、サマショール（立入禁止汚染地区に住み続ける人々）の村へ年に2回の定期健診を行っています。
・お年よりは病院へ行きたがらないため、村のスーパーの入り口で年寄りを捕まえては、健康診断をするという努力をしています。そこでは、肺の検査を行っています。
・ドイツの医療支援団体からも、主に消耗品の支援を受けています。

◎ベトカ地区実行委員会長との会談

日本からの支援に大変感謝いたします。チェルノブイリ事故で、59の村が無くなり、80ある村のほとんどが影響を受けています。

２万人が移住をし、うち６千人がベトカから去りました。すでに20年が経過していて、良くなっているものは多々ありますが、放射線の影響は続いています。日本からの長年にわたる支援に感謝しており、ＪＣＦとのよりよい関係を今後も望んでいきます。

―所感―

ベトカは、今後も支援の必要がある病院です。一部新しい機器の購入も見られますが、レントゲンの印刷機など、必要なものがそろっていないのが現状です。院長は大変まじめな方で、熱心に地域の医療を支えています。

このように、地道な努力をしている病院には進んで支援をしていくべきではないでしょうか。また、院長は我々との関係を保つことを強く望んでおり、機器の支援だけでなく、文化的な交流があると良いと思います。院長の行っている汚染地域への回診に同行し、診察に必要な機器の供与の検討をするべきだと思います。

小児科のプレイルームで力丸さんのお話を聞く子ども達

・力丸さんによる折り紙と絵本の読み聞かせ。
『へそもち』
『モーっていったのだあれ？』

◎モロヂチノ地区病院

・ＪＣＦからは、過去にエコー、呼吸器、モニタの供与を受けています。
・エコーは、約10年間使用しました。当時は大変重宝しました。
・現在は、ＣＴもレントゲンもあり医療機器は充実しています。
・昨年と一昨年に保健省からの援助で新しい機器をいくつか購入しています。
・モロヂチノ地区には、10の病院があります。また診療所やＥＲ（緊急救命室）も完備しています。
・21全ての地域に医療施設があります。
・人口は約14万人で、年齢別の分布は

14歳	１００００人
15～17歳	６０００人
成人	１１４０００人
老人	３００００人

・モロヂチノ地区は、14の汚染地域がありますが、いずれも1～5キュリー以下と低く、８９０人が生活しています。
・チェルノブイリの30㎞圏内から２０２０人の移住がありましたが、がんなどの発病率は同じです。
・移住してきた人たちは、毎年健康診断を受けています
・毎月、病院でレポートをまとめており、この地区における死亡率は、心血管病が56％、次いでがんが12・7％、その他事故による感染症等が続いています。
・１０００人死亡率が13・9に対し、出生率は、9・0であるため、人口は微減の状態です。
・病院全体では、10の内視鏡の部屋があり、各部屋に1つないし2つの内視鏡があります。しかし、それらは年代の古いものであるため、新しいものを求めています。
・小児のための小さなＩＣＵがあります。
・検査室には、最新の生化学検査器があり、前立腺がんの検査をする検査室もあります。

・現在は、４３０人の医師が在籍していますが、この病院の規模では、７００人の医師が必要です。若い医師が少なく、必要としています。
・現在のベラルーシは、各州に心臓センターを設立するなど医療の発展は目覚しいものがあります。しかし、ベラルーシの平均寿命は67歳。女性の平均寿命は73歳ですが、男性の平均寿命が61歳と依然として低い水準であります。勤労年齢における死亡率が20％であることなど、死亡率が及ぼすコミュニティへの影響を懸念しています。女性の非労働者（50歳以上）が21万人に対し、男性の非労働者人口は８万３千人であり男性の低い平均寿命がわかります。

―所感―

モロヂチノ地区病院は規模も大きく、発展した町です。そのため、医療機器のような物の支援は必要ありません。院長は、堅い雰囲気の方でしたが、帰り際に慌ててお土産を用意してくれるなど、意外と人情味のある方なのかもしれません。発展した町には、それなりの付き合い方として、学術や文化レベルでの交流ができる可能性があります。

感想

病院によって、医療機器の状況が異なり、それぞれにおいて、よく考慮したうえで機器の提供をしていかなければなりません。医療機器導入のルール変更で、今後は購入資金の援助という形に支援の仕方が変わってくると思います。しかし、病院との関係がお金だけの関係になってしまうのはたいへん悲しいことであり、ＪＣＦの支援が彼らの単なる財布にならないよう注意する必要があります。

ゴメリ州立病院付属産院にて
スベトラーナ産院長（中央）セルゲイ医師（左から二人目）

医療機器の購入に当たって、現地の要求に対し、購入物品に対するアドバイス、納品時や使用方法の講習会での立ち会い、機器の導入前後の効率の変化についても調査を行い、慎重に支援を進めていく必要があると思います。

しかし、このためには、現地の人との今まで以上の深い関係を持つ必要が出てきます。一方的な提案でなく、お互いに協力する体制が確立されなければいけません。

事故からすでに20年以上が経ち、支援の仕方は大きく変わろうとしています。当時小さかった子ども達は、すでに大人になっています。病院を支えてきた支援は、地域医療のレベルを向上させました。今後は、この支援が子ども達の教育や文化交流へ発展し、ベトカ地区のように村全体を復興させるきっかけを作っていけると良いと思います。

21世紀は、ソフトの時代です。物品の供与というハードによる相対的な支援から、絶対的な信頼関係でつながる支援へと変わっていけるよう、努力する必要があるのかもしれません。

今後の支援における提案

・現地にて症例報告会を開催
・ドイツなど医療先進国への研修を支援
・学生間交流（解剖実習などの共同開催）
・医療関係者と患者のための図書館を建設

チャリティ・コンサート
「ふるさと〜プラハの春」

― 平和を祈るコチさんからのメッセージ ―

津田ホールで演奏するヴラダン・コチさん、有吉英奈さん

深く、そして軽やかに響くチェロの調べ。
「私ができることは、なんでもします。音楽でとどける想いを聞いてください」。
ヴラダン・コチさんは、自身の艱難を乗り越え、子どもたちの平和を祈って、魂の音を奏でる。
コチさんの音楽に私たちの思いが、重なっていく。

支え合って21世紀

◆ 新しいＪＣＦ会員制度◆

2008 年度総会で審議された結果、会費制度が変わりました。

■正会員；会員総会において議決に加わることができます。

年会費　1 口 10,000 円（何口でも）

正会費をお振り込み下さった方を正会員として登録いたします。

■賛助会員：この法人の目的に賛同して、資金協力を行う個人及び団体

年会費　1 口 3,000 円（何口でも）

★今までと同様に会費納入から 1 年間が会員有効期限となり、「グランドゼロ」やイベント等のお知らせをお送りします。

特別賛助会費・事務局ガンバレ会費は無くなりました。制度変更前にお振込み頂いた方については、振込から 1 年間は特別賛助会員・事務局ガンバレ会員として登録させていただいております。

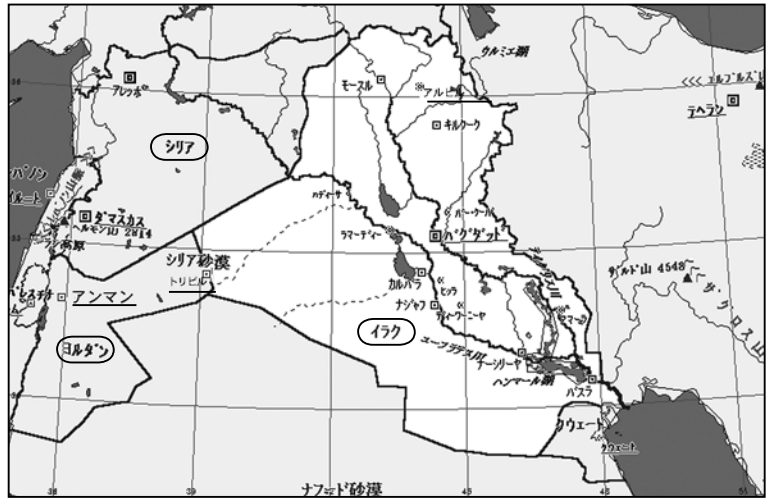
大勢の皆さまに会員としてＪＣＦを支えていただくように、よろしくお願いします！

■ＪＣＦ会費振込口座

郵便振替口座番号	00560-5-43020
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金

イラク戦争から６年

加藤　丈典（ＪＣＦヨルダン事務局）



３月20日、明け方の便でアンマンから、イラクの北部クルド地区の中心地アルビルに向かう。

偶然にもこの日はアメリカによるイラク戦争から６年目。ちょうど６年前のこの時間、アメリカはイラクに空爆を開始した。窓からはイラクのどの都市だろうか、暗闇の中に明りが浮かんで見える。深夜のフライトは静かに、時折ギシギシと音を立てながら飛んでいく。６年前にイラクを空爆したパイロットも同じ光景を見ていたんだろうか、と眼下に広がる街の明りに目を向けた。この高さからなら人が殺されるのは見えないだろう。パッと爆弾が燃焼する明りが光って、立ち上る煙を後に戦闘機は高速でその場を後にする。一生経験しないだろうし、またしたくもない事を飛行機の中で想像してみた。落とされた爆弾はまるで水の波紋のように広がっていった。暴力の連鎖、宗派対立、がん、難民など広がり続ける波紋は６年目の今どこまで到達しているのだろうか。

昨年、イラクとアメリカの間で地位協定が結ばれ、イラク国内に駐屯する米軍が２０１１年までには完全撤退することになっている。また今年の２月には地方議会選挙が行われ、大きな混乱もなく終了した。イラクの治安は良くなっているように思える。しかし延期されていたクルド県の地方議会選挙が近々控えており、また年末には議会選挙も行われる予定である。これまで棚上げにされていた問題はここ１年が正念場になると思われる。イラクが今後どうなるか、今後の政治動向にも注意してみていかなければならない年になりそうだ。

さて以前から医療支援を続けている国境のトリビルキャンプだが、我々は難民基金を設立し、難民の緊急支援を昨年９月から行っている。

イラク、ヨルダンの国境間のノーマンズランドに位置するキャンプはまさに人がいない土地であって、３６０度砂漠に囲まれたところで、かれこれ５年に及ぶテント生活を続けている。ＵＮＨＣＲ（国連高等難民弁務官事務所）はここへの支援が行いにくいこと、また北イラクが避難先として安全だということから彼らにクルド地区への移住を勧めてきたが、１９４名のイラン系クルド人難民はこれを拒否してきた。彼らは安全と確固とした市民権を求めてヨーロッパへの移住を希望しているが、プロセスは進まない。

これまでこのキャンプから出ることができたのは水頭症という難病に侵されたコマール（３歳）の一家が例外的に許されたのみである。このキャンプの医療状況は非常に難しい。現在医療サービスといえるものはＭＳＦ（国境なき医師団）の月１回の訪問診療と不定期に供給される薬品類のみである。緊急時にはイラク国内へ搬送されるが、イラク国内の病院の医療設備も良くないためアンマンへの搬送が要求される。しかし難民のアンマンへの搬送はヨルダン内務省からの許可が必要とされ、その取得には多大な時間を要する。１月30日に３人の患者がアンマンに搬送されてきたが、入国手続きには１ヶ月以上要した。現在も搬送を希望する患者達からの切実な訴えは途切れることはない。

また一方で３月16日、17日に我々はＪＣＦで支援を続けているアルワリード難民キャンプを３ヶ月ぶりに訪問した。今回はキャンプの詳細な視察のために、キャンプ内に設置されているキャラバンを借りそこに一晩泊めてもらうことに。３月のキャンプはとても寒い。キャラバンの冷たい水で汚れた

顔を洗うと、ここでの生活の辛さは一層身に染みる。キャラバンを貸してもらった我々はまだ良い。難民たちは、それぞれのテントから、水を汲みに出て行かねばならないし、その水も敷設された水道管が壊れて水が漏れ出したりして、水が十分に行き渡らない状態だ。我々のローカルスタッフで、今回、同行してくれたアブー＝サイードは一晩中吠え続ける犬のせいで眠れなかったと愚痴った。

2008年トリビルキャンプの加藤さん（左端）

キャンプは数日間続いた嵐のために一部のテントはなぎ倒され、共有トイレの水タンクや屋根が吹き飛ばされて転がっていた。そのため難民たちはテントや壊れた建物の修繕に当たっていた。彼らの嘆きはその他にも、薬が不足していることなどがあり、問題は山積みである。

今回のこのキャンプ訪問では、ここで暮らすパレスチナ難民の戦争体験の聞き取り調査も行った。彼らパレスチナ難民の多くは２００６年２月に起こったマルキドサーマッラーモスク爆破事件の後に、殺害や脅迫によって迫害された者がほとんどである。特定の宗派に属しているとの理由で、もしくはパレスチナ人という理由で、殺され、拷問され迫害を受け、国境まで逃げてきたイラクのパレスチナ人。

今回はキャンプ内の学校を訪れて子どもたちの様子を見せてもらった。学校での子どもたちは元気だ。彼らが楽しみを見出せる唯一の場所は学校で過ごす時間だ。しかし中には、病気やけがの治療や、またはバグダードにいた頃とはカリキュラムが異なるため学校に出てこない子どもも多いという。彼らは自分たちの生活が特異で困難に満ちたものだということを知っている。しかしなぜこういう境遇におかれたのかわからない。

子ども達にここでの生活で大変なことは何かと聞いてみた。

「水を汲みに行くのが大変だよ。テントから遠いんだ」

「お父さんがお腹を壊したのに診療所には薬がないんだ」

「犬がテントの中に入ってくる。全部食い荒らしてしまうんだ」

「嵐がくるとテントがひっくり返される。水も入ってくる。最悪だよ」

中には、実際に爆弾や砲撃の被害に遭った子どももいて、シャツをまくってその痛々しい傷跡を見せてくれたものもあった。

とあるテントを訪れた時メルベドという女の子がここでの厳しい生活を詠った詩を披露してくれた。彼女はこのテント生活での唯一の楽しみは詩作をすることだという。ノート一杯に可愛らしい装飾が施されたアラビア文字がびっしり刻まれている。彼女は「悲しい鳥」というペンネームで詩作を続けているが、このペンネームは翼をもがれた飛べない鳥を自分の境遇に重ねているのだという。

「わたしが残念に思うこと」

悲しい鳥

わたしが残念に思うこと
　それはこのような時代
わたしが残念に思うこと
　それはこのような呪われた生活
わたしが残念に思うこと
　それは希望とは裏腹に進んで行く人生
わたしが残念に思うこと
　それはこれまでに失ったたくさんの
　もの
わたしが残念に思うこと
　それはこれまでに見つけれらなかっ
　たたくさんのもの
わたしが残念に思うこと
　それは私が生きることなく消えて
　いってしまった人生

このイラク戦争によって、イラクには暴力の波紋が広がり、彼ら難民達は国境へまた国外へと押し出されていった。6年もの期間が経過し、人々の関心は薄れつつある。確かに治安は回復した。しかしその影に関心を持たれず未だにこのような厳しい環境に身を置いている難民達の存在を決して忘れてはいけない。

限りなき義理の愛大作戦'09を終えて

佐藤　真紀（ＪＩＭ―ＮＥＴ事務局長）

カードの絵を描いたアヤもチョコを味見しました！

◆今年は7万個を！

今回は、7万個のチョコレートをつくりました。おかげさまで、無事に募金活動を終え、約3千276万円が集まりました。

この作戦は、イラクのがんで苦しむ子どもたちの医療支援のための募金活動であると同時に、戦争についてじっくり考えてもらうための取り組みでもあります。

2006年当時、イラクでは治安がどんどん悪くなっていきました。薬は不足し、医者たちは脅され、誘拐を恐れ国外へ避難し始めました。

ヨルダンでイラク難民からは、誘拐され拷問を受けたといった類の話を聞かされるのに、日本に帰ってくると、クリスマスだ、正月だ、バレンタインデーだと沸き立っています。そのギャップに、僕はどうしてもついていけない事がありました。「イラク戦争は開戦から、自衛隊の米軍への協力も含め、初めて日本が積極的に戦争に協力した。いわば、イラクの混乱は、日本の責任なのに」

イラクにかかわっている知り合いからの年賀状の中には、同じように、おめでとうという気分ではないので新年の挨拶は控えさせていただきますと書かれているのもありました。日本がイラクとどう向き合うのかが、僕のテーマになりました。

そのころ、ローカルスタッフのイブラヒムが、イラクにもどり、院内学級を始めていました。院内学級の子どもたちが描いた絵を持ってきてくれるのですが、赤やピンクの色とりどりのハートの絵がたくさんありました。バレンタインにぴったりの絵なのです。

バレンタインデーの由来をしらべてみると、ローマ時代にさかのぼります。「ローマ帝国皇帝クラウディウス2世は、愛する人を故郷に残した兵士がいると士気が下がるという理由で、ローマでの兵士の婚姻を禁止したといわれている。キリスト教司祭だったバレンタインは秘密に兵士を結婚させたが、彼が捕らえられ、処刑されたとされるのが2月14日である」

愛こそは、平和を作るすべてというわけです。そこで、このかわいらしい子どもたちの絵を使って、募金とともに、平和を訴えていこうというのが、「限りなき義理の愛作戦」でした。このネーミングは、衝撃的で、「すばらしい！」という絶賛の声と「義理の愛とは何事だ」というお怒りの声もわずかですがいただいています。

◆イラク支援は日本の義務

〈砂漠の盾〉〈限りなき正義〉〈畏怖と衝撃〉〈亡霊の夜明け〉〈砂漠の狐〉〈不朽の自由〉、これはなんだか判りますか？　米軍がイラクやアフガンで行った軍事作戦の名前です。さしずめバレンタインデーに攻撃するときは、「限りなき真実の愛」作戦とでも名づけたでしょう。僕はそういう美辞麗句のもとに多くの市民や子どもたちが殺されていることが我慢できなかったのです。だったら命を救う作戦にも名前をつけてやれ。ほとんどの日本人はイラクの人には親身になれないと思います。だったら、義理でいいんじゃないか。義理チョコでもやっぱりもらってうれしいし、みんながもらえて不公平がないことが、国際協力の基本です。義理チョコでも助かる命があるんです。イラク支援は、僕は義理＝義務だと思っています。

◆いつかはイラクでカードを

7万個もチョコを作れば、多くの人に見ていただけ、メッセージを伝える媒体になります。

今年は、サマワに住んでいるハウラという女の子と、一緒にデザインを作ろうということになりました。彼女にいくつかのモチーフを描いてもらい、

それをもとにデザインを作りました。まだまだ危険なのでバスラにはいけず、遠隔操作でやり取りをしましたが、いつかは、子どもたちと一緒に作業できたらいいなと思います。

◆ＮＨＫでも紹介

もう１人絵を提供してくれたアヤは、がんで右足を切断していますが、とても明るい子です。２００５年の暮れにヨルダンに治療に来ていました。他の子どもたちは、家賃をＪＩＭ―ＮＥＴから支援していましたが、アヤは別でした。どんなところに住んでいるんだろうと見せてもらうと、病院から30分は離れているところに、小屋のような部屋を借りていました。私たちが支援しているアパートとはぜんぜん違うんです。援助が生み出す格差ですね。治療が終わってもそのままヨルダンにとどまる人や、難民申請して、アメリカやヨーロッパにいける人もいますが、アヤの一家は、バグダッドに戻りました。彼女の父と母は宗派が違うのですが、そのあとバグダッドは、宗派対立が激化し地獄になっていきました。

バレンタイン・チャリティ絵画展

ＮＨＫのバグダッド支局とやり取りして、現地取材をしてもらいました。僕もアヤの家を見るのは初めてなんですが、お父さんもあまり仕事がないみたいで、ぼろぼろの家に住んでいました。でも将来の夢をＴＶカメラの前でしっかり話しているんですね。よく生き延びたなあと。最近バグダッドの治安がよくなったといわれるんですが、彼女の笑顔を見ていると、この国の未来に期待してしまいます。

これまで「限りなき義理の愛」で絵を使った子どものうち、ラナ、ファラ、ドゥア、ヒジュラーン、アスラール、ハニーンが亡くなりました。そして、アハマッドのお父さんはテロで死んでいます。これが6年間のイラクの現実です。

ＴＶを見たという方もたくさんいらっしゃいましたし、ＮＨＫとしても、バレンタインということで企画が通り、バグダッド取材ができたことを喜んでらっしゃいました。ＮＧＯやメディアが協力して、社会正義を達成するのは当たり前なのに、このイラク戦争では、それができなかったのではないでしょうか？　その責任は大きいのです。

未だに、イラク戦争は、正しかったといいつづけますか？

イラクと駒ヶ根とチョコのはなし

西村陽子（イラクの子どもとなかよくする会）

アファークプロジェクトに参加しているイラクのお母さん

そもそもの始まりは、長野県南信地区の高校で教鞭をとる菅沼先生との出会いだ。菅沼先生は、４年前から、高校の授業やクラブ活動でイラクへの支援、交流の場を設けてくれている。

２００７年夏、バスラの院内学級の担任イブラヒムが来日、菅沼節子先生のアレンジで駒ヶ根の赤穂高校を訪問して授業をした。その後、菅沼先生から電話があった。「わずか25分のイブラヒムの話だけでは、生徒たちが具体的に動き出すには足りない。もっと支援の話をしてほしい」と言われ、赤穂高校に出向いた。それがきっかけである。イブラヒムが授業をした学級以外にも、「世界のこどもたちについて知ること」をテーマに活動していた図書委員会主催の講演も企画されていた。

２００８年の赤穂高校の文化祭に、図書委員会はイラクの展示を計画していたが、「展示だけではなかなか興味をもってもらえない、何か工夫でき

ないか」と担当の野口操先生から打診があり、イラク人家族の手作りクラフト（アファークプロジェクト）を販売してもらうことになった。中でも、アラブ風のアクセサリーは予約注文をとるほどの好評だった。そして、この展示を見た市民の方にすすめられ、市の国際交流イベントにも出展することになった。歩行者天国で展示をし、アファークの製品を売ったほか、ヨルダンから運んだお菓子やイラク・ティー（チャイ）の試食コーナーなども設け、冷たい雨の中、大好評だったという。

それ以外にも図書委員たちがずっと思い続けていたことがあった。それは「鎌田實先生の講演会を自分たちの手で開きたい」ということ。その思いを手紙にしたためて、鎌田先生に渡し、願いがかなったのが、２００９年の１月。

さらに、図書委員たちは「もっと自分たちにできることはないのか？」と熱かった。「人手が大量に必要なチョコの袋詰めはどうか？」ともちかけてみた。クリスマス直前の放課後、有志に集まってもらい、セロファン袋にチョコとカードを詰める作業を行うことになった。「人が集まらないのでは？」という心配をよそに、図書館は作業をする場所もないほどになった。

帰り際に「チョコは７万個あるんですよね？　もう一回やりましょうか？」と野口先生と図書委員長のＫさん。そして、1月中にさらに2回、チョコ詰めボランティア作業が行なわれることになった。大勢でできるように広い教室を2つ用意してもらった。時間になると「サッカー部」「バドミントン部」などのジャージのグループが続々と集まってきた。60人を越える作業の結果、約６０００個が完了。

しかし、大勢集まりすぎて説明が行き渡らなかったせいか、「やり直し」が大量に出てしまった。そこで、２日目は作業前に一人ずつ、先日詰めたチョコを見せた。生徒たちの表情が一様に固まる。「え？　これ、俺たちが詰めたやつ？」「私たちの責任？？」とてもまじめな人たちだ。そして、誰がいうともなく袋詰めしたチョコを点検してから、ダンボールに詰めるようになった。出来上がりは言うことなし。さすが日本の高校生。３回の作業で１７０００個のチョコを詰めることができた。

一方で対照的におおらか（おおざっぱ）なのが、アンマンでアファークプロジェクトに参加しているイラクのお母さんたち。

「どうして、布に赤い汚れがついているの？」

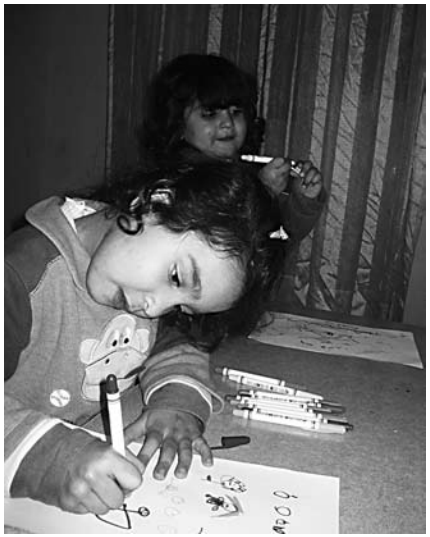
「あ、それ？　糸を噛み切った時に口紅がついたのよ」（わかってるなら、落としといてください!!）

「布がしわくちゃにつっているのだけど、刺繍枠を使わなかったの？」

「そんなのなくても、ちゃんとできてるじゃない!!」（しわくちゃ！）

なかなか手ごわい。

アファークプロジェクトは、ヨルダンにがんの治療に来ているイラクの子どものお母さんたちが、子どもの絵やイラクの風物をモチーフにした手芸作品を作り、それを日本で販売し、収益をヨルダンでの生活費の足しにしてもらうというプロジェクトだ。



巾着袋の絵を描くシャヘド５歳（手前）と白血病のムハンマド（3歳）

今年で、３年目。治療が終わってイラクに戻った家族もいれば、新しく来た家族が加わったりして、今は６家族が参加している。彼女たちが「仕事」として生活費を稼ぐことができるというメリットはもちろん、看病の合間に「自分だけの時間」を確保したり、趣味として楽しんだりして、生活にメリハリがつくという。

先日、娘の絵を刺繍にした小さな巾着を縫いあげたお母さんが言った。

「一つほしい。娘が幼稚園に行くときに持たせたい。自分の絵を刺繍した母親の手作りバッグを持つなんて、とても幸せだと思う」

そんな小さな満足も、新しくできた高校生とイラクの絆も、ささやかかもしれないが、かけがえのない成果だと思う。

赤穂高校に温かい空気が流れたとき

野口　操（図書館司書）

―チョコ袋詰めボランティア―

・12月22日　図書館企画に60人が参加し約３０００個。
・1月15、16日　生徒会企画に延べ１４０人が参加し約１４０００個。

図書館でチョコ袋詰め作業をする赤穂高校の生徒

長野県赤穂高校では、ＪＩＭ―ＮＥＴと連携したイラクの学習と交流支援を行っています。1年前図書館で企画した「西村陽子さん講演会」を前に、白血病の子どもたちに千羽鶴と絵手紙を送ろうと図書委員がクラスで呼びかけたことが始まりです。鶴も絵手紙もたくさん集まらず、イラクのことを知らない生徒たちに協力してもらうことは難しいと感じましたが、西村さんのお話を聴いた委員からは支援活動をしたいという声が上がりました。そこで文化祭ではイラクについて調べたことを展示発表し、白血病の子どもの家族が作ったクラフトの販売や募金活動を行いました。その後駒ヶ根商店街でも展示する機会に恵まれ、地域の方からもたくさんの募金をいただきました。駒ヶ根市のワールドフェスタには有志を募って出展し、民族衣装を着てのイラクティーサービスやクイズの出題、クラフトやお菓子の販売などを行いました。

これらの祭りで展示した手作りのアクセサリーやカレンダー、お菓子と紅茶、イラク文化を知ることができる小物や民族衣装、子どもたちの写真などはすべて西村さんが送ってくださったものです。見ごたえのある展示となり、多くの人が関心を寄せてくれました。イラクの子どもたちが喜んでくれると実感できて生徒たちは大喜びでした。お互いの顔が見えるかたちでイラクと日本の子どもを繋いでくださる西村陽子さんのおかげだと大変有難く思っています。

1月9日には念願の鎌田實先生講演会が実現しました。鎌田先生が、図書委員の要望に応えてくださったのです。心にしみるお話をわかりやすい言葉で語ってくださり、大変感動的な素晴らしい講演会になったことは言うまでもありません。担任からは生徒の表情が変わったという報告がありましたし、生徒からはこんなにいろいろなことを考えた講演は初めてだった、感動したという感想がたくさん寄せられました。

講演会を前にして、私たちは鎌田先生への感謝の思いを形にできないかと悩み西村さんに相談しました。そして今回のチョコ袋詰めボランティアとなったわけです。当日は生徒がどのくらい集まるか心配しましたが、予想を遥かに上回る40人以上が真剣に作業を始めました。少し遅れて会議を終えた生徒会役員も加わり図書館内はいっぱいです。窮屈な作業となりましたが、約３０００個の袋詰めができました。参加者が多かった理由のひとつには、講演会事前学習で鎌田先生の本を読んだことが挙げられると思います。

２回目の企画は講演会直後、生徒会役員が放送で呼びかけました。鎌田先生のお話に感動した多くの生徒たちが自主的に参加しました。イラクの子どもの役に立ちたいと考えて、いつもは最優先のクラブ活動の時間を割いた生徒もいました。「何かをしたい」と思ったその時に「何かができる」という経験は、「何かができた」への一歩になったと思います。しかし、初日は大勢が一度に来てしまったので説明も点検も十分にできなかったことは失敗でした。ＪＩＭ―ＮＥＴでやり直していただいた袋も1割ほど出てしまったようです。２日目は、西村さんからの丁寧な説明のあと作業を始めましたので合格点をいただけました。

来年度はもっと大規模に袋詰めをやりたいと生徒たちは張り切っています。やり方の説明をきちんと行いチェック体勢を整えておけば今年よりうまくいくでしょう。全校に参加者を募るというこのやり方は、参加人数が事前に把握できないため慌てることが多いですが、各人が自分の意志で参加することは貴重な経験になります。鎌田先生のお話を聴くことができた生徒たちが卒業しても活動が後輩へ引き継がれるのかはわかりませんが、イラクとの交流と支援活動の一環として続けられたらいいなあと考えます。

今、定時制の生徒たちがハサン君とムハンマドちゃんに届ける千羽鶴を折っています。西村さんが5月にヨルダンに行かれる時に託したいと思います。チョコ袋詰めが終わった今も温かい空気が流れています。

ご支援に感謝、感謝、感謝。

鎌田　實

チョコカードの絵を描いたアヤと鎌田理事長

驚愕、怒涛の冬が終わった。

昨年の夏くらいから、好評の毎年恒例になった義理チョコについて議論がはじまった。

ＪＩＭ―ＮＥＴ事務局で議論が行われた。みんなで決定してきた数字に驚いた。７万個。１個５００円。北海道の六花亭の安全でおいしいチョコレートに、イラクの病気の子どもたちが描いた絵をつけて売り出す。ＪＩＭ―ＮＥＴの事務局長で、ＪＣＦの理事を務めている佐藤真紀さんが、デザインの提案をしてくれた。

そのうち、佐藤真紀さんがデザインしているのではないことがだんだんにわかった。真紀さんのパートナーがデザインしていた。家族総出である。家内工業といってもいいだろう。

ＪＩＭ―ＮＥＴの一員としてＪＣＦもお手伝いする事に決めた。注文はＪＩＭ―ＮＥＴがとり、ＪＩＭ―ＮＥＴの指示のもとに発送を手伝うことになった。いちばんの家内工業は、ＪＣＦの事務局にボランティアとして日参してくれた太田さん。事務局のスタッフとして働いてくれている森さん。家に持ち帰り、家族でチョコレートの発送の準備をしてくれた。一家団欒の食後の時間に、ご主人や子どもたちが発送の準備をしてくれた。ありがたいことである。

ぼくの家族も総出で参加した。妻や嫁いだ娘、息子の嫁さん、嫁さんのお母さん。女組がぼくの講演先に片っ端から掛け合って、チョコレートの販売のお願いをした。女組は強い。すでに講演のおわった所にも、チョコレートやヴラダン・コチのチャリティ・コンサートをお願いした。チケットを注文して欲しいとお願いをしてしまう。バリキがすごい。

チョコレートを応援しているうちに、ネットワークが強化されていった。ＪＣＦの資金を稼ぐために、坂田明さんに協力してもらって発売した『ひまわり』と『おむすび』の２枚のＣＤは、再び活発に売れるようになっていった。『ひまわり』は、２万４千枚を超えて２万７千枚へ向かっている。おむすび』は３千５百枚。ＣＤが売れない時代に突出した販売力である。病気の子どもたちの薬代にたいへん貢献してくれる。

支えは家族だけではなかった。学校の力が大きかった。松本市立筑摩野中学校、蟻ヶ崎高校、エクセラン高校、松本第一高校、たくさんの生徒が学校の帰り道に事務局に寄って、チョコレートのパッキングをしてくれた。ありがたいことです。

各種の新聞やホームページ、グランドゼロなどを読んで、一般の市民たちが友人を誘って駆けつけてくれた。

以前から応援をしてくれていた赤穂高校の応援はすさまじかった。まず、昨年末に60人が参加して３千個のパッキングをしてくれ、１月のいちばん大変な時期には、なんと１４０人が参加して１万４千個のパッキングをしてくれた。あついあつい応援である。涙が出るほどうれしかった。

ＪＩＭ―ＮＥＴからイラクの病気の子どもたちを支援するために、ヨルダンのアンマン事務局に派遣されている西村さんが赤穂高校で何度も講演し、人脈をつくってきた。そのおかげである。ぼくも赤穂高校にお礼の講演にいった。「教科書にない１回だけの命の授業」を行った。お礼に行くと再び、あたたかな支援がドーンと入る。人情のあたたかさを感じた。「あったかい心」が互いの間をいったりきたりした。結果として、チョコレート７万個を売り上げ、あつい絆をつくっていった。おかげでたくさんのいい仲間ができた。感謝です。

高田馬場にＪＩＭ―ＮＥＴの事務局ができた。その事務局の人たちは、ぼくがラジオでチョコ

難民キャンプの子どもたちと

レートの話をするたびに、休みを返上して事務局にやってきて、鳴りっぱなしの電話を逃さずに受けるというゲリラ的な活動をし、注文をＪＣＦにつなげてくれた。事務局のクマさん、ヒカリさん、アイちゃんのパワーがすごい。

３月13日のヴラダン・コチのコンサートのチケットは、このあついネットワークに守られて、津田ホール５百席、昼夜２回公演はあっという間に数日で売り切れた。会場側と相談をし、「消防法があるので、客席は増やせないが、舞台ならばいい」と許可を得て、なんと特別シート５千円のパイプ椅子の席を30席、舞台の上につくることにした。これも数日で売り切れた。

左から有吉英奈さん、鎌田理事長、通訳の久野さん、コチさん

ヴラダン・コチのチャリティコンサートもおかげさまで、子どもたちの薬代になります。

チャリティコンサートに関しては、ヴラダン・コチの友人である山口さんご夫妻が家内工業的にボランティアで走り回り、準備をすすめてくれた。本やコンサートの情宣活動をする会社の社長、山田美恵さんが、コンサートが円滑に行われるように大きな力となってくれた。

３月13日、ヴラダン・コチのチェロのクラシックＣＤが発売された。すばらしい出来である。昨年夏プラハで録音された。

選曲については、皆であついディスカッションをし、日本人が好きな曲、日本人のこころを揺さぶるような曲を選んでいる。

チェロの名曲『鳥の歌』からはじまり、日本のうたである『ふるさと』や『浜辺のうた』、アルゼチンタンゴ、オペラの名曲、チェコの作曲家ドボルザークの曲など、日本人がよく知っているすばらしい曲ばかりだ。ヴラダン・コチのボランティア精神には感激している。

２００９年２月28日の朝日新聞の「ひと」欄に、寄付文化の革新を目指す企業ができたという話が載っていた。

日本のＮＧＯがよい活動をしながら資金をつくれず、挫折する姿を何度もみてきたという。ファンドレイジング（寄付集め）を助ける社会的企業を鵜尾さんという方が起業したのである。

たしかに日本のＮＧＯは台所が苦しい。もちろん、ぼくたちのＪＣＦの台所もずっと苦しかった。それでもあつい応援のおかげで18年生きながらえることができた。

鵜尾さんはこんなことを言っている。

「単なるお金集めではなく、活動への共感が大切。寄付する人もよろこびを感じ、世界が元気になり、よい循環を生む」

寄付文化の革新元年をめざし、日本ファンドレイジング協会ができたそうだ。

鵜尾さんがやろうとしていることを、ＪＣＦは先取りしながら、ヨチヨチ歩きでやってきたように思う。諏訪中央病院のホスピタルコンサートでは毎年募金活動が定着した。今年のひな祭りには、看護部がバザーを開いて募金してくれた。諏訪中央病院看護専門学校も文化祭では募金集めをしてくれる。共感が広がり始めると、今年の３月は患者さんが１３０万円も寄附してくれたり、驚くようなことが起きる。永六輔さんや村上信夫さんがチャリティ会場に立つと、ダンボールに信じられないような額の募金が集まる。新しい社会貢献のカタチ、文化ができ始めた。まだまだ発展途上だが。たくさんの人の応援で、やっと生きながらえている。いつか鵜尾さんにお会いして、ファンドレイジングの新しいスタイルについても勉強させてもらおうと思う。

ＮＰＯの土台をしっかりさせることは、日本ではとても大変である。18年間、苦労をし続けてきた。組織をしっかりさせるために、事務局の人たちには安いながらも、きちんと給料を払い、組織の強化につとめてきた。しかしまだまだいたらないことが多い。

台所事情が厳しいので、もちろん理事長としては18年間、日当をもらったことはない。交通費も一度も請求したことはない。ＪＩＭ―ＮＥＴが７万個のチョコレートを売ると決めれば、えっと驚き、これを売り切るのは大変だぞと自分に言い聞かせ、たくさんの新聞、マスコミ関係者、ラジオのディ

満員の津田ホール

レクターにお願いをしまくった。自分のスケジュール調整をし、頭を下げ、走りまわって、たくさんの人たちのご協力を得た。とくに今回、大沢悠里さん、永六輔さん、村上信夫さん、大竹まことさん…たくさんの方々が親身になって応援をしてくれた。ありがたいことだと思っている。自分もボランティアの一人と思って活動をさせてもらった。

はやく組織の体力を強化して、若者たちへバトンタッチしたいと思っている。バトンタッチするには、若者たちが続けていけるように、有給の新しい常勤理事長をおき、組織強化もしていかなければならない。

ＪＣＦが外国で医療支援をしたことによって、微力ながら、日本という国のセーフティーネットの一助になってきたと信じている。今後はＪＣＦの土台をしっかり構築し、皆さまがたの力をさらにさらに借りながら、新しい日本のＮＰＯの形を、模索していきたいと思っている。

イラクの小児科医Dr.リカがお母さんをお連れして、３月に松本へやってきた。戦乱のなかで疲れ切っている。疲れを松本で癒して、いい勉強をして欲しいと願っている。これから信州大学で小児科学や基礎医学の勉強を３年間する。遺伝子医学の勉強もしてもらいう予定だ。劣化ウラン弾と子どもの白血病の因果関係を将来、イラクで調査できるようにしたい。信大小宮山学長や小池病院長や信大の方々にお世話になると思う。

松本の方々には、Dr.リカが日本の生活に慣れ、しっかり医学の勉強ができるように、サポートをお願いすることになる。お母さんが異国の日本で生活にも、つまずかないようにしてあげなければならない。お力添えよろしくお願いします。

７万個のチョコレートを売り、音楽ＣＤを想像を超えるほど売り、そしてチャリティコンサートのチケットを数日で完売したＪＣＦの応援団はすごい。

２００８年の年末から２００９年はじめにかけての、疾風怒濤の冬は終わった。

もうすぐ信州にも春がやってくる。

たくさんの人々に感謝、感謝、感謝。

あったかい心は、ブーメラン！

谷田部裕子（ナージャ希望の輪）

素晴らしい演奏でした。コチさんは、素晴らしい方でした。

やさしく強く、美しくてあたたかに、チャリティコンサート「ふるさと」は、私たちに、生きている事、愛する事の喜びを深く感じさせてくださいました。

グランドゼロ78号の鎌田先生の「プラハの春」を読んで以来、コチさんの魂が奏でる音色を是非聴きに行きたいと願っておりました。ボランティアスタッフとして参加する幸いに恵まれて、大きないただきものをしました。

まずはコチさんの言葉をお伝えします。体調が万全ではない中を神様にお祈りしつつのぞまれたという、渾身の演奏を終えた夜遅くに、コチさんはスタッフ一同のもとに来てくださって、明るい笑顔でおっしゃいました。

「病に苦しむ子供達の支援のために演奏する事ができたのは、私の喜びです。聴きに来てくださった皆さんのおかげです」と。

一流のプロの演奏を無報酬でなさった方から、私たちは実に真心あふれるお礼の言葉をお受けしたのでした。頭の下がる思いでした。

同じように、ピアノの有吉さん、コチさんの世話人の山口さんからも謝辞を頂戴しました。本当にありがたいことです。

募金集めに協力な助っ人、永六輔さん登場！

この日、鎌田先生は、しきりに「あったかい集いにしましょう」と語られていました。「世界には憎しみの連鎖が絶えないけれど、あったかい心もまた、ブーメランのように返ってくる…」と。

私自身、10年前の東海村ＪＣＯ臨界事故に遭遇し、子ども達の健康への不安の中で、ＪＣＦや他の多くの皆さんのあたたかさに支えられました。

ＪＣＦの活動は、90回を越える医療支援団派遣や国内での講演会、ＪＩＭ―ＮＥＴでの共働等、多岐にわたりますが、なかでも私にとって上映会やコンサートは、身近な人々にお声かけして時と場を共有できる嬉しい機会です。「ナージャの村」「アレクセイと泉」の自主上映会や、本橋監督のサポートで作成のお手伝いを経験できた「スライド・ナージャの村」映写会がそうでした。

NHKの村上アナウンサー（左）キムタクのお母さん（中）鎌田理事長（右）

そして、昨年今年と、コンサートでは、普段は遠く離れて暮らしているたくさんの見ず知らずの方々とご一緒できて嬉しかったです。

鎌田先生のお話に眼差しを据えてうなずく人、コチさんの演奏に目をつぶって聴きいる人、また、会場に駆けつけて募金を呼びかけてくださった永六輔さんや村上アナウンサーやキムタクさんのお母様が差し出す箱にご寄付くださる人、裏方の仲間たち、あるいは、あの日眼前にはいらっしゃらなくても、グランドゼロの振込用紙コメントやお名前リストに知る方々、…たくさんのあったかさを実感した一日でした。

ホールを出る皆さんから「よかったです」「また来ます」とお声がかかり、とてもしあわせでした。

世界の現実の日々は、厳しいです。「生きたい」と願っている子どもたちに生きてもらうために、あったかい心のブーメランをあきらめず、時には強い勇気をがんばって、微力ながらも投げかけ続けたいものだと、あの日のヴラダン・コチさんの少年のようにやわらかな笑顔と、命がけで信念を貫く強さとに接して、思いをあらたにしたふるさとコンサートでした。

皆様、またどこかでお会いしましょう。

信州大学医学部附属病院コンサートに参加して

小祝さくらこ
（ＪＣＦボランティアスタッフ）

病院で演奏するコチさん（右）と有吉英奈さん（左）

今回、信州大学病院で行われたヴラダン・コチさんのチャリティコンサートをＪＣＦボランティアの一員として、私もお手伝いさせていただきました。

『グランドゼロ』に書かれた記事などを読んではいましたが、コチさんについて知らないことが多く、またチェロに関しても乏しい知識しか持っていなかったので、コチさんの音楽や思いをしっかり受けとめることができるかという不安がありました。けれど、患者さんのためのコンサートが終わった時には私も会場も、想像もできなかったパワーと感動と温かさに包まれていました。

そのコンサートが終わった後のことです。ある患者さんがコチさんのＣＤがほしいと言って来てくれました。できたらサインもほしい…と。患者さんにはロビーで待っていただき、私はコチさんのいる控え室に向かいました。直接、お願いするのは失礼だと思い、コチさんを紹介してくださった山口さんに頼むことにしました。控え室前で数分待っているとＣＤを持って現れたのはコチさんご本人でした。優しい笑顔でコチさんは「ありがとう。患者さんによろしく伝えてね」と言ってくださいました。そのＣＤを持って、患者さんのもとへ走っていくと、患者さんの顔がぱっと明るくなり「ありがとう」とそのＣＤを大事そうに持って帰られました。

コチさんは演奏を聴きに来られた患者さんや観客のみなさまにも、このコンサートの主催者の方々にも、そして共に音楽を演奏した仲間に対しても深く感謝していました。もちろん、チェロやチェロから奏でられる音楽をとても大事にしていました。コチさんの演奏を目をつむって聴いていると、いろいろな価値観からの拘束がゆるみ、何も隠さない裸の心で音楽を聴いている

信州大学医学部附属病院でコチさんの演奏に聴き入る患者さん

ような気持ちになります。忘れている大切なものを思い出させてくれました。コチさんの音楽のみならず、彼の人間性のすばらしさを実感するひとときでした。

帰り道、なぜコチさんはこのような活動をしようと思ったのかということをもう一度ゆっくり考えました。まだ、自分には至れない気持ちが彼には確実にあるのだろう…と思いました。私が生きてきた19年間の体験と経験からコチさんの演奏活動の原動力となるものを推測したりしました。彼のこの活動の背景には何があるのか…、さらには、宗教や政治による制約や弾圧など、人間が生きているこの地球では何が問題なのかということにつながっていきました。

答えはまとまりませんが、このような問いを考える貴重な機会にめぐりあえました。これから自分がどのような信念を持って、行動していくべきかということも教えていただいたように感じます。

このようなチャンスや感動、温かさを教えてくれたコチさん、共に演奏された方々と山口ご夫妻、大学病院の先生方、ＪＣＦの方々、そしてこのコンサートを支えてくれた人たちに感謝しています。

本当にありがとうございました。

イラク人医師Dr.リカのＪＩＣＡ長期研修プログラム参加にあたって

勝亦　菜穂子
（独立行政法人国際協力機構　東京国際センター人間開発課）

ＪＩＣＡ長期研修プログラムについて

独立行政法人国際協力機構（ＪＩＣＡ）は、途上国から技術者や行政官を日本に招き、その国で必要とされている知識や技術を学んでもらう〝研修員受入事業〟を行っています。この事業は日本の政府開発援助（ＯＤＡ）の中でもっとも長い歴史をもち、１９５４年に開始されて以来国内各層に支えられて事業が発展し、延べ25万人を超える途上国の人がプログラムに参加しました。毎年約１４０カ国から選ばれた８千人を越える人びとが日本各地で、保健医療、教育、農業などの分野の研修に参加していますが、そのうち大学等に在籍し学位を取得するタイプの長期研修プログラムには現在約40カ国１７５名が参加しています。

この度、長期研修プログラムに参加が決定したイラク人医師Dr.リカは、ＪＩＣＡの奨学金を受けながら２００９年２月～２０１３年３月までの４年間、信州大学大学院博士課程にて小池教授、坂下医師の指導のもと「イラクにおける小児白血病発症に及ぼす影響に関する分子遺伝学的研究」について研究を行う予定です。

プログラム実施までの経緯

２００３年以降イラク国内の治安情勢が悪化し、技術協力プロジェクトで日本から専門家を派遣する等の協力が困難であるため、日本政府は当面は日本での研修員受け入れプログラム及び第三国での研修プログラムによる人材育成を中心に国際協力を実施するという方針のもと、保健医療分野では専門医師及び看護師の医療技術の向上を目標に掲げていました。しかしながら当時イラク国内にＪＩＣＡ事務所がなく、ＪＩＣＡヨルダン事務所を通して研修プログラムの要望調査や研修員の募集にあたっていました。そのような状況の中、２００７年に腫瘍分野に対する支援についてイラク保健省から博士課程取得をめざした長期研修プログラム実施の協力要請が出され、２００８年、受入大学として信州大学大学院医学系研究科の協力が得られることになったこともあり、受入・実施が決定しました。

難航したイラク人医師の募集

しかし、４年間という長期間のプログラムでもあり、イラク国内の一般的状況から家族をおいて単身で来日するのが難しいこと、信州大学の定める資格に合致すること、或いは、語学力、職場の許可等、全ての条件を満たす候補者はなかなか現れませんでした。その最大の原因は、前政権時代の迫害の影響とそれに伴う医師の国外脱出等によりイラク国内の医師の数が圧倒的に不足しており、医師が職場を離れられない状況があることです。特にがん患者を抱える医師は長期に亘って患者を診ており、途中で担当患者を離れることが難しいという状況、またこのような事情から医師が働く病院が長期留学を許可しない（できない）という状況があります。また、この長期研修プログラムは博士号取得を目的とした研修であり、修士号取得よりさらに専門分野が特化した内容となり、イラク側が推薦する候補者と、大学が定める職歴・研究歴等に示される専門分野などの条件がなかなか一致しなかったという問題もありました。

懸念していた矢先、10月にトルコで行われたＪＩＭ―ＮＥＴの会議で坂下医師とDr.リカが再会し、本長期研修プログラムについて話されたところ、Dr.リカが本研修プログラムに興味を示し応募することになりました。

母親を呼び寄せ松本での生活がスタート

その後Dr.リカは２００８年12月に信州大学の研究生として合格が決定し、２００９年２月に来日する予定で手続きが進められていました。そんな中、イラク・モスル地域という危険な地域の出身であること（特に医者等高学歴者は迫害の対象になりやすく、また少数派であるキリスト教徒であるため更に迫害の対象になりやすい）から、生命の安全の保障されない場所に家族をおいて自身だけが単身で来日することはとても難しいとして、Dr.リカより母親を同伴したいとの申し出がありました。ＪＩＣＡヨルダン事務所を通じてDr.リカの現況を聞いてみたところ、前に住んでいた家は爆弾で破壊され、その後も３回爆弾の危険が身に迫ったため、勤務先の病院の近くの小さな家に避難して生活しているとのことでした。しかしながら、入国管理局の定める家族滞在査証発給の対象に母親は含まれません。母親１人をおいての来日が困難であれば、大学入学が決まったものの入学を断念せざるを得ないという問題に直面しました。そのためＪＩＣＡはDr.リカが母親と共に来日できるよう東京入国管理局や外務省関連部署などに経緯を詳しく説明し特別措置を取ってもらえるよう依頼するとともに、ＪＩＣＡヨルダン事務所やDr.リカ本人との度重なるやりとりを続けました。そしてDr.リカは２００９年２月19日無事に母親とともに来日し、３月初旬に松本市内に無事引越しを終え、４年間の大学生活が始まりました。

Dr.リカを訪ねて

フストレーチャ：出会い

ВСТРЕЧА

Dr.リカ（リカ・アルカザイル医師）は、ＪＣＦイラク支援やＪＩＭ―ＮＥＴの医療支援先となっているモスルにあるイブン・アル・アシール小児教育病院で小児がんの治療にあたっていました。ＪＩＭ―ＮＥＴ医療会議にも参加され、信州大学医学部小児科小池教授や坂下医師と小児白血病の治療についてカンファレンスを重ねてきました。

今回ＪＩＣＡ長期研修プログラムのサポートにより、４月から４年間、信州大学医学部で研修を受けることになり、お母さんと一緒に３月３日に松本にやってきました。

信州大学に近いアパートへのお引っ越しで大わらわの３月９日、時間を頂いてお二人にお話を伺いました。

◆先生の御出身とイラクでのお仕事は？

出身はイラク北西のモスルです。モスルにあるイブン・アル・アシール小児教育病院（※教育病院というのは医師養成も行なっているための名称）で、小児がん病棟の長を務めていました。

◆今回の長期研修の目的は？

専門性を高めるためです。私は既に小児科学のPh.D（博士号）と同等のアラブ・ペディアトリック・ボード（Arab Pediatric Board）のメンバーとしての資格を持っていますが、更に腫瘍学の専門性を高めたいと思い日本に来ました。

イラクにいる患者のために、白血病に関して遺伝学的な面から研究を行うのが目的です。イラクでは爆撃が日常的で安全が保障されない状況なので、非常に貧弱な設備しかありません。私たちは、より専門的な診断に必要な先進的な科学や先端技術を持っていないのです。核型（※その個体が持つ染色体の体系的配列）やＣＤマーカー（※リンパ球の表面に存在するタンパク質で、細胞系統を特定できる分子）の解析ができません。そこで白血病の形態学や血液標本の鏡検などの原始的な方法に頼らざるを得ないのです。白血病のタイプを診断するための設備がありません。

私は遺伝学的な基礎にもとづいて白血病を診断する方法・知識を得るために日本に来ました。病棟の中でどんなことが行なわれているのかを広く知りたいと思っています。

Dr.リカ

アラブ・ペディアトリック・ボード（※シリアのダマスカスが本部）のメンバーとしての資格は、日本でこれから取得しようとしているPhDと同じくらいのレベルだそうです。イラクではPhDがリサーチなど学術的経験や資格があれば取れるのに対して、ボードメンバーになるには臨床実績が必要なため、より難しいとされています。Dr.リカは小児医学の資格がありますが、腫瘍学の資格は持っていないそうです。

◆医師を志したのはいつですか？また、なぜですか？

私の子どもの頃からの夢は医師になることでしたが、実際に医師になるのを志したのは17歳の時でした。１９９３年に医科大学を卒業して、医師として働き始めました。小児科医として働きながら、ボードの資格を取得する勉強を５年間続けました。その５年の内の２年半はバグダッドで小児腫瘍学のトレーニングを受けました。それから白血病やがんの患者のために働きました。そしてこれから、遺伝学的研究を学んでさらに専門性を高め、私の患者たちをもっと助けたいと思っています。そのためには、遺伝学的な問題に応じて、腫瘍学の最新のデータに基づいた最適な医療方法を用意することが必要です。患者が直接原因遺伝子を持っている場合、それを診断すれば最適の医療方法を提示できます。

イラクでは医師になるのは二つの道があるそうです。医学部６年終了後、２年の研修医を経て、一つは普通に個人クリニックや病院で勤務する方法。もう一つは、アラブ・ペディアトリック・ボードの資格を取るために働きな

がら、実績を積む方法。給与の点でも院長などの役職につくためにも、このボード資格は重要だそうです。

Dr.リカはボードの資格に挑戦し、始めの2年半をバグダッドのサルマ医師のがん病棟で勤務しながら学び、その後の2年半はいろいろな医師のもとで学びました。ボードに挑戦する資格を得ること自体かなり難しく、Dr.サルマの弟子として選抜される際もかなりの難関だったそうです。小児科の資格を得たあと、腫瘍学の資格も得ようとしたのですが、1990年代、それ以上の学習の場がなく取得できませんでした。イラク国内にそれを取得できるだけの実習を積めるような場所がなかったのです。

◆なぜ腫瘍学を学ぼうと思ったのですか？

腫瘍学に興味がありました。

がんの治療は治療期間が長期で、イラクの医者にとっては儲けになりません。しかも、長期の高額の支払いによって、ついには患者が支払いができなくなるケースもあるので、がんの患者は敬遠され、がんを専門に治療しようという医者があまりいませんでした。私にとっては、まさにその理由で腫瘍学を志したのです。私はより苦しんでいる人々、困っている人々を助けたいのです。

◆イラクでは治安が悪いということですが、先生の病院ではどんな問題が起きましたか？

私は2004年からの4年間で病院を3つ転々としました。それは治安の悪さが理由です。

最初の勤務病院はアル・サラム病院でした。私の病棟は腫瘍病棟で、総合病棟からは離れていました。総合病棟には腫瘍以外の小児疾患、たとえば肺炎の患者などが入院していました。免疫力が低下した患者には個室が必要なので、腫瘍病棟には隔離個室が備えられているべきです。

腫瘍病棟の病室は4床ずつベッドが設置されています。また、集中治療用の個室もありました。

イブン・アル・アシール小児教育病院で診察するDr.リカ

2004年に米軍がアル・サラム病院を占領して、病院の中に入ってきました。兵士たちがドアを開けて入ってきて窓を破り、銃で子どもたちの手を挙げさせました。彼らはテロリストを探していたのです。彼らは銃を前面にかざしてドアを開け、錠を壊し、薬品庫を壊しました。私はどうすることもできず、混乱しました。

このあと、私は病院を移る決心をしました。私はアル・サラム病院の病院長のところに直接行って助けを求め、別の病院に移りたいと頼みました。私のすべての患者と薬品を別の病院に移したいと頼みました。彼は人道的な立場から同意してくれて、私はイブンシーナ病院に移ることができました。

イブン・アル・アシール小児教育病院病室

イブンシーナ病院は総合病院です。専門分野に応じて6つのフロアに分かれていました。ここにも総合病棟がありました。私は再び、一つのベッドしかない個室から始めました。マネージャーが私たちを助けてくれました。私は16床のベッドを得て、他の病棟から隔離しました。

しかし、ここでも問題が生じました。患者が増え続け、衛生の問題、感染のコントロール、水質などの問題が持ち上がりました。感染をコントロールすることが難しく、私は2年後イブン・アル・アシール小児教育病院に移る決心をしました。

イブン・アル・アシール小児教育病院は、イラク戦争後に改築されました。これまでの病院のなかでは最も清潔な、ヨーロッパスタイルの病院です。隔離病棟や個室があり、傷病者や救急患者のためのベッド、30床のフリーベッドがありました。16床のベッド、隔離されたとても良いユニットがあり、隔離病棟を設置しました。モスルの公的小児腫瘍学のセンターとして認識されていました。私はそこの長で、すべてを統括していました。JIM—NETの援助による薬品の管理もしていました。

1番目の病院を去ったのは危険のため、2番目の病院を去ったのは感染のコントロールの問題があったためです。3番目の病院は、治安の面、清潔さの面、供給量の面で一番よかったのです。清潔対策はとても重要です。がん患者を死から防ぐ主要な要素の一つです。なぜなら、免疫機能がゼロの場

イブン・アル・アシール小児教育病院

合、厳重な隔離が必要だからです。

◆イラクでは感染で命を落とす人が多いのですか？

ええ、とても多いです。また、出血は今も最も重要な死因のひとつです。血液バンクの供給が十分でないからです。爆撃が続き血液がたくさん必要なので、バンクの供給が追いつかないのです。たくさんの献血が必要です。血液バンクは十分な供給量を保っていなければなりません。

時にはこんなことが起こります。私のある患者の血液型はB型Rhマイナスでした。とても珍しい型なので、血液バンクにも1本か2本のストックしかありません。ある日、大きな爆発事故があり、負傷者に対しバンクの血液が使われました。その夜私の患者に輸血が必要になりました。しかし不運なことにもうB型Rhマイナスの血液はありませんでした。翌朝彼女は亡くなったのです。

◆イラクを4年間離れるにあたり、気がかりなことはありますか？

私の患者たちのことが気がかりです。でも、インターネットを通じた診察によって、彼らとはコンタクトを取っています。イラクのインターネット環境は良好です。接続さえしていれば、コミュニケーションは円滑に取れ、相談に対して私が返信しています。

それから、イラクに残してきた2人の弟とその家族のことが心配です。

◆先生がお母さんと日本に来ることについて、弟さんたちは心配されましたか？

いいえ、私のほうが彼らのことを心配しています。イラクは治安が悪いので…。

◆お母さん、Dr.リカはどんな子どもでしたか？

物静かで賢い子でした。

お母さんのフダさんへの英語での質問を、Dr.リカがアラビア語で通訳、お母さんのアラビア語の答えを、Dr.リカがちょっと笑いながら英語で伝えてくれました。

Dr.リカとお母さんは19歳しか年が違わないこともあって、親子というより姉妹のように見えます。

◆家事はお母さんがなさるのですか？

母はかつて教師として働いていましたが、こちらでは家にいることになるので、この事務局にも時々お邪魔することになると思います。

イラクでは私は料理をしませんでした。日本でも料理は母がします。私は料理が苦手ですが、母は料理上手です。当面はイラクにいた時と同じ食事を作ってくれます。食材は手に入るものを調達します。たとえば、米、トマト、ジャガイモ、豆など日によって変わります。

◆今生活面で不自由なことは？

言葉です。パソコンのウイルス対策のソフトを買いに行ったのですが、店の人にわかってもらえず買うことができませんでした（後日神谷が手伝って入手できました）。あとは、まだたくさんありますが、生活様式が違うことです。家の広さや食べ物など、多くのことが私たちには奇妙に映ります。文化が違うからですね。イラクの家は今の家の40倍の広さがありました。

それからライフスタイルです。イラクの人々は治安の問題があるにもかかわらず、愉快に過ごしたいと思っています。日本人はもっとまじめな人々で、一日中働いています。

それから、食べ物。生の肉や魚（寿司）、私たちの文化では受け入れられないものです。生の魚？　いいえ、私はまだ試していないです（笑）。馴れるには時間がかかります。私のアパートの近くにあるレストランで食べた食べ物はとてもよかったです。なんという食べ物かは分かりませんが、牛肉にご飯が添えられ、あと2品、豆やスープがついていました（近くの自然食レストランの定食）。イラクの食べ物に見た感じは似ていましたが、イラク風ではありませんでした。でもおいしかったですよ。日本料理を初めて食べました。

◆日本にいる間に、医学の勉強以外で身につけて行きたいことはありますか？

科学、小児腫瘍学ですね（やっぱり医学に関心が向く答えに、ご自分も苦笑…）。日本の文化ですか？　時間が必要ですね。第一段階として、多くの新しいことに驚いている、といったところでしょうか。すこしずつ慣れていくようにしたいです。

◆Dr.リカはクリスチャンだそうですが、イラクで教会に通うのは大変になっていませんか？

困難な時もあります。去年の10月、私たちモスルのクリスチャンの置かれた状況が悪くなり、モスル郊外の村に避難しました。テロリストは教会の壁に脅迫状を貼り付けました。そして、家を爆破したり、名指しした人を殺したりしました。脅迫内容は必ず決行されたので、警察でさえ何もできないのです。そういうわけで、２００８年の10月の終わりから教会に行く機会を奪われています。

私たちはしばらくモスルには戻れませんでした。なぜなら、彼らが私たちクリスチャンを脅したからです。政府はこれらの問題解決のために大軍を送って来ました。教会をテロリストから守ろうとしたのです。クリスチャンの住居を守るため、各地区に軍を配備しました。しかしながら治安問題は解決されず、私たちが日本に来る１週間前にも２人の女性が家の中で殺されました。テロリストが彼女らの家に押し入り、姉妹を殺したのです。クリスチャンだと言う理由で。

このように、多くの困難がありますが、私たちは祈ること、教会へ行くことをやめません。

◆松本でも教会には行かれましたか？

はい、松本カトリック教会に行きました。私たちのミサと似てはいましたが、ずっと日本語でのお話でしたので、やはり言葉が問題となりました。コミュニケーションを図るために、やはり日本語を学ぶ必要がありますね。

イラクでは毎日曜日にミサがあり、必ず行っていました。クリスチャンのコミティがあり、土・日・月曜日に私も母もその活動に参加していました。コミティは、女性に、文化や今日の新しい事など宗教を越えて多くの問題について教え、導くものです。例えば『ドンブラ』というビンゴやすごろくみた

Dr.リカ（右）お母さんのフダさん（左）は姉妹のようです

いなゲームがあり、キリスト教の教えなどに関するクイズを通して、教義を学習しながら楽しみます。時には絵を描いたり、裁縫したり。女性のために多くの活動を教会の中でしました。クリスチャンの女性対象です。教会には多くのコミティがありましたが、私はふたつのコミティに参加していました。一つは女性対象のコミティ、もう一つは土曜日に行う、祈りのためのコミティで、毎土曜日の午後２時から５時まで行なっていました。

◆日本の印象は？

いい国です。日本の人は助けようとしてくれるし、また、奥ゆかしく礼儀正しいです。今回の来日を準備してくれた人々も親切で素晴らしい人たちでした。ＪＩＭ―ＮＥＴ会議のオーガナイズを通じて知り合ったさだ子さん、ＪＩＭ―ＮＥＴやＪＶＣ、ＪＩＣＡのスタッフのみなさん、多くの人々が私の来日のために尽力してくれました。私は日本人を尊敬しています。

◆日本でどこか行ってみたいところはありますか？

そうですね、まだわかりません。京都ですか？　知りません。東京以外の都市は知りません。東京には松本に来る前に12日間、ＪＩＣＡの研修センターに滞在していました。母は上野の動物園に行ったんですよ。そして駅近くの百円ショップに行きました（お母さんは百円ショップが大変に気に入って、松本でも手芸の材料をたくさん購入してご機嫌でした）。ＪＩＣＡでは大勢のアラビア人が勉強しています。また、秋葉原に行って電気店でパソコンを買いました。パソコンは日常的に使います。イラクのほうが安く買えます。

日本はすべての物価が高くてびっくりします。日本が物価高なのは知っていましたが、こんなに物が高いなんて想像していませんでした。ほとんどのものがイラクの４～10倍の値段です。例を挙げると、イラクでは10kgの玉ねぎを2.5ドルで買えます。でも日本では一個１ドルですね（笑）。大きな違いです。

イラクの治安は悪いですが、物資は豊富でとても良いところです。私たちイラク人が持つ思いやりの精神を示す例があります。引っ越してきた家庭があると、歓迎の心をこめて始めの１週間は隣人が食事を持ってきてくれます。だから引っ越してきた人は１週間、料理をする必要がありません。これはイラクの文化です。でも日本ではだれもドアをノックさえしません。ひとりぼっちの気分です(笑)。イラクの人々は自分の周りにいるすべての人と関わりたいと思っています。何が起こっているか、どこから来たのかを知りたい

と思っています。

◆先生のご趣味は？

母と同じで絵を描くことです。母は芸術に優れていますが、私が描くのは初歩的な絵ですね（笑）。

お話の流れでフダさんが事務局にプレゼントしてくれた紙粘土で作った人形が登場します。

紙を水に溶かして粘土のようにしたものを使います。これは20年前に母が作ったものです。私はイラクで15年前に、クリスマスツリー用にキリストの家、ヨセフとマリアとキリストの聖家族と羊たちを作りました。

紙粘土の人形を持ったフダさん

私達が作り方を教えて下さいとお母さんに言うと、お母さんはにっこり笑ってこう答えました。

「ええ、教えてあげますよ、アラビア語もね」

◆グランドゼロの読者にメッセージをお願いします。

日本人の精神性は他国にないものです。日本人の助力の精神や礼儀正しさはほかでは見られないと思います。

しかし、私が日本に来て直面した最初の問題は、いかにしてコミュニケーションをとるかということでした。

日本の皆さん、ぜひ、英語を学んでください！　共通語ですから。他国の人とコミュニケーションするために、言語の問題があるために、日本人は孤立してしまっているように感じます。日本人が英語を知れば、外からやってきた人々ともコミュニケーションがとれてスムーズになります。世界の他国にもっと知られるようになるでしょう。アメリカを始め外国からより多くの人々が日本を訪れるようになり経済効果も上がると思います。もっと日本の文化も知られるでしょう。日本人がどんなに助力の精神に満ちているか知られることでしょう。

§

このインタビューをまとめるにあたって、「アラブの子どもとなかよくする会」の西村陽子さんには大変にお世話になりました。イラクの医療体制や学位など、現地に滞在しイラクの方と細やかにつきあってきた西村さんならではのフォローとチェックで、Dr.リカの言葉の真意をお伝えすることが可能になったと思います。

西村さんはDr.リカ親子とは以前からの友人で、お二人の松本滞在が少しでも快適なものになるように、色々と力を貸して下さっています。

西村さんはアファークの活動の一環として、ＪＣＦ事務局の展示コーナーの一部に「イラクの手作りコーナー」を設けて、アンマンのお母さん達が作ったものや、フダお母さんが作ったものを陳列することを検討しています。そしてフダさんにそのコーナーをチェックしたり飾り付けたりするために事務局に定期的に来て頂くという案も…。フダさんはシーツの空き箱を利用して飛び出す絵を作ったりされていて、リサイクルが得意そうなので、「もったいない思考」の西村さんと気が合いそうです。

Dr.リカの研修が始まると、一人で寂しくなるかもしれないお母さんの活躍の場を、みんなでプラン中です。

Dr.リカが充実した研修を受け、お母さんを通じて文化の交流ができたら素敵です。

お二人の滞在が実り多いものになりますように…。

（事務局・布山）

フダさんが空き箱で作った立体画

クオリティ・オヴ・ライフ

NO.35

宮尾彰

三月末、すっかり忘れていたところに不動産屋から封書が届きました。借家の賃貸契約の更新時期だそうです。

そこで出かけて行って、久しぶりに社長と話したのですが、その時おまけにちょっと面白い話を聞きました。

最近、都会から畑付きの借家に引っ越してくる人が急増しているお陰で商売繁盛だ、とのこと。海の向こう側からリーマンブラザーズ問題の余波が押し寄せて以来、『本当に頼りになるのは、やっぱり土から生えてくるものだけだ』ということにみんな少しずつ気づき始めているようです。

早いもので、この家に住み始めて丸二年が経ちました。テレビとパソコンの無い暮らしについては、以前に『沈黙の純度』（本誌七十二号）で書かせていただきましたが、去年の夏以降、更に沈黙が深まりました。ＣＤプレーヤーが故障したのです。最近は部品交換に出そうとすると必ず『お客さん、はっきり言って新しい物に買い換えた方が、お安いですよ』と言われることに決まっています。そして、実際そうなのです。そこで、しばらく判断を保留することにしました。気が付いた頃には、いつの間にかＣＤを聴かない生活になっていた、というしだいです。

私が考えているのは、「しばらくそれ無しでやってみる」というライフスタイルについてなのですが。

友人からは『音楽も無いんじゃあ、お茶に寄る気にもならないよ』と忠告されました。でも、深く本が読めるし、物事を考えざるを得ませんので、『検索力よりも思索力を』という最近のお勧めにもかなった生活なのです。

＊

「お魚の美味しい冬のうちにぜひお出でください」

数年来、小松の友人から熱心なお誘いがありました。

私は諸事情からずいぶんのご無沙汰を重ねて来たのですが、春のはじめ、思い立って彼の地を再訪しました。

今回も、下道で糸魚川までは約五時間のドライブ。その後、石川には富山を越えて鉄路で入りました。糸魚川から特急で一時間ほど行くと金沢に着きます。

金沢駅で乗り換えた時、それまで無言で隣り合わせていた老紳士がこぼれるような笑顔で言いました、

「お世話になりました。やっと着きましたねぇ。どうぞお気をつけて」。

まるで、ひょっこり生きた良寛さまが現れたようでした。

小松に着いた私は、再会した友人と雑木林の大谷さん宅（本誌五十号参照）を訪ねました。ほんのわずかな時間でしたが、彼女の笑顔を見ながら、私はおのずから数年来の自分の生活を振り返っていました。このご家族の生き方が、無言の内に問いを孕（はら）んでおられるからです。

あらためて、もう何年もお会いすることがなかったのに私たちの間に時間や空間の隔たりを超えた不思議な交感が続いていたことを知りました。

旅から帰って、重篤な病で入院中の叔父を見舞いました。叔父は、社会的に大きな仕事をし、人望は厚く趣味も豊かな人生でした。病を得て以来、好きだった畑をあきらめ、蘭作りをあきらめ、日がな一日病床に臥せっています。

人生の意味が、名声を博したり財産を蓄（たくわ）えることにあるとしたら、今の叔父の生活は下り坂を転がり落ちるようなものでしょう。

でも、私は最近、叔父が今までとはまったく違った眼でこの世界を見つめ直しているように感じるのです。握っていたものをひとつ又一つと手放しながら、新たにひとつ又一つと何かを受け取って生きているかのように。

クオリティ・オヴ・ライフ。この言葉も、そろそろ医学や福祉の教科書から抜け出して、私たちに親しい日本語になるといいのですが。

ベラルーシの食卓

春はぬくいスープ

忙しい時も、旅から帰った後も、食事にあたたかい汁物があると気分が変わります。なんだかホッと落ち着きますね。今回はモスクワに住むジーマさんが、何よりも好きだったキャベツスープです。ジーマさんのお母さんは、いつもおいしいピロシキやスープをごちそうしてくださいました。ジーマさんにとっては、まさにお袋の味です。やわらかい春キャベツが出回る頃です。ザクースカ（塩漬して、少し醗酵させたキャベツ）を使ったスープもありますが、春キャベツは絶妙な味を出すので、手軽に挑戦してみましょう。ブイヨンをしっかりとると、まろやかな時間がもどってきます。

＜材料＞

牛すね肉　300ｇ・水　10カップ・キャベツ　小1/2・玉ねぎ　1個
ジャガイモ　2個・にんじん　1/3本・トマト　1個・ニンニク　1個
月桂樹の葉　1枚・塩　小さじ2～3・バター、油　各大さじ1
コショウ、香草、サワークリーム　適量

＜作り方＞

1. 鍋に肉と水を入れ、弱火で1時間アクを取りながら、ブイヨンをとる。
2. 玉ねぎ・ニンニクをスライスし、にんじんは千切り、トマトは角切りする。キャベツはざく切り、ジャガイモは千切りにする
3. フライパンにバターと油を熱し、ニンニクを炒める。
4. 玉ねぎ・にんじん・トマトを入れて、更に炒める。
5. ブイヨンの中へ、4.の野菜を入れ、キャベツとジャガイモ、月桂樹の葉を加え、塩とコショウで味を整える。
6. 水を加えてじっくり煮込む。
7. 皿に盛り、香草とサワークリームを添える。

モスクワ便り

今日は、モスクワではなく、ウラルのエカテリンブルグ近くの不思議な場所についてお話しします。ウラル山脈はユーラシアをヨーロッパとアジアに分けています。この街は、ロシアの有名なエカテリーナ女帝にちなんで名付けられました。1918年、ロシア最後のツァー（皇帝）ニコライ2世とその家族が共産主義者によって銃殺されたという悲しいできごとがあった街です。

エカテリンブルグから30km離れた松林の中にある村に、インド式の医療と美容のセンターがあります。こじんまりした敷地の木に囲まれた堀の中、夏には花が咲き乱れ、冬にはきれいな深い雪が積もる小さな広場を囲んで、木造3階建てのホテル、ヨガホール、医者が診察を行う本館とインドレストランが建っています。

インド人の専門家が、古代インドの方法で患者のストレスを解消し、健康と美容を取り戻します。スタッフは、医者1人とマッサージ師2人、コックさんです。彼らはインドから来て半年か1年働き、シフト制で交代します。治療は、正しい食事、マッサージ、サウナとヨガです。食事はベジタリアン向けで個人に合わせたインドの香辛料を使います。インド式マッサージにも、個別に選択された健康にいい特別のオイルが使われます。皮膚、筋肉や関節に良いだけではなく、気の流れをよくします。はじめは足で、次に手が使われ、時にはマッサージ師2人がかりで行うものもあります。

患者が滞在する建物は、自然な素材でできています。部屋の壁や天井、家具は松でできていて、いつも新鮮な木の香りがします。床にはセザリという植物性のじゅうたんが敷いてあって、部屋には日本と同じように靴を脱いで裸足で入ります。

このセンターにはふわふわした毛のバルーという名の犬がいて、皆にかわいがられています。バルーとは、キップリング作の小説「ジャングルブック」で男の子を育てた熊の名です。ロシアの子どもたちは、皆この話を知っていて、バルーが大好きです。犬のバルーの仕事はセンターを守ることですが、ここには敵がいないので、ずっと患者と遊んでいます。バルーと遊ぶことが、センターの治療の中で一番効果的だと言われています。

イリーナ・ニコラエワ（モスクワ事務局）

АНЕКДОТ

◆В парке на лавочке сидят двое влюбленных.Вдруг он замечает,что какой-то мужчина подает его девушке загадочные знаки:
-Что вам нужно ? -возмущается парень. Идите отсюда.
-Да я пошел бы, но ключи от квартиры уже ны.

◆Простой способ борьбы с пробками:
Разрешить питьна работе.Тогда все будут веселые,довольные и ездить на автобусе.

◆Больше всего повышению с типендий рады не родители студентов и преподаватели, а пивоваренные компании.

◆Три стадии взросления мужчины
1) Он верит в Деда Мороза
2) Он не верит в Деда Мороза
3)Он - Дед Мороз

◆Финансовый кризис.
У женщины умер муж. Жена, услышав это,запричитала:
- На кого ты нас бросил? Что мне теперь с детьми делать?
И так денег не было, тут еще ты умер!
Ну и так далее в этом стиле.
Ночью приснился ей муж и во сне говорит:
-Не переживай так! Потерпите до лета, а тамя вас всех к себе заберу!

ジーマの

ロシア小話

◆恋人同士が２人で公園のベンチに座っていた。ふと男性は、ある男が自分の彼女に謎めいた合図を送っているのに気づいた。
大変憤慨した男性は、その男に言う。
「何か欲しいものでもあるんですか。無いならよそへ行ってくれないか！」
「行ってもいいですが、家の鍵を妻が持っているので、受け取りたいのです」

◆簡単な渋滞対策
職場での飲酒を許可する。するとすべての人は気持ちがよくなり、満足し、バスで職場に通うことになる。

◆学生の奨学金の増額を一番喜ぶのは、学生の両親ではなく、ビール・メーカーです。

◆男性成長の３つの段階
1. 彼はサンタクロースを信じている。
2. 彼はサンタクロースを信じていない。
3. 彼自身はサンタクロースである。

◆金融危機
夫を亡くしたある女性が嘆いている。
「こんなとき亡くなるなんて…。わたしたちは誰を頼ればいいの。子供はどうするの？お金も無いし…」
夜になると、夫は夢に出てきていう。
「そんな興奮しなくていい。夏まで我慢してくれ。そしたらおまえたちをみんな私のところへ連れてきてあげるから」

――ストレリツォフ・ドミートリさんよりのアネクドート――

振替用紙のメッセージから

◎チェルノブイリで今もなお苦しんでいる人々の為に役立てて下さい。
◎いつも丁寧な資料を送って下さり感謝。思い切って賛助会員に申し込みます。
◎長らくご無沙汰いたしまして申し訳ありません。遅ればせながら正会費をお納めいたします。
◎会員によるクリスマス献金です。
◎愛を込めて。
◎今年もベラルーシからクリスマスカードを頂きました。エコセンターで会ったカーチャたちのことを想い出しました。ひとりでも多くの子どもたちが良い治療をうけられますように。
◎いつもお世話になりありがとうございます。心ばかりですが子どもたちの希望につながればうれしいです。
◎素敵なクリスマスカードありがとうございました。雀の涙ほどですが、お役にたてて頂ければ…。
◎早速のクリスマスカードありがとうございます。２００８年は世界情勢（特に経済）が悪化していますが、イラクに２００９年こそテロなどが起こらず子供達が元気に遊べるような国になってほしいです。良いお年を！
◎自分のできることを続けていきたいと思います。皆さまの活動に感謝の気持ちでいっぱいです。
◎CO_2削減効果有りと原発の宣伝が盛んにされています。溜まっていく放射能廃液のことなど真実を子どもたちに教えなくてはならないと思います。
◎みんなが少しつましい暮らしに戻ることが何より大切では。
◎クリスマスカードをありがとうございました。ささやかですが、子どもたちのために役立てて下さい。
◎心ばかりですがお役に立てて頂ければ幸いです。
◎子どものために。
◎善意はあたたかい光そのもの。
◎バザーでご寄付頂いたものです。

◎忘れてはならないことがある。継続すること。私にできること。スタッフの皆さんに気持ちを送ります。
◎個展の一日をＪＣＦへのチャリティーとして、有志10名と「蔵の中」本澤陽子さんから寄付されました。微力ですが応援しています。
◎新しい年が、生きとし生けるものすべてに平和で暖かなものでありますように…。
◎寄付欄で自分の名前を見つけ、何かとても嬉しくなりました。人様のお役にほんの少しでも立てるのなら、生きてきた価値があります。皆さまの優しいお心に頭が下がります。どうぞ良い世の中になりますように。
◎今年も一年お疲れさまでした、ささやかですが…。
◎鎌田さんの「プラハの春」に感動。その昔失意のモーツアルトを温かく迎えたのもプラハの人々でした。長野県でもコンサートをやって欲しいです。良いお年をお迎え下さい。
◎鎌田先生の「プラハの春」を読んで、涙がとまりませんでした。今からＣＤ発売を楽しみにしています！　コチさんの音楽で多くの人達が癒されますように…。
◎新年に当たり平和な一年を願っています。
◎日本内外の社会状況は厳しくなってきましたがこの活動はどんなことがあっても続けていって欲しいと願っています。
◎新しい年になりました。みなさまにとって良い年になりますように。お身体に気を付けて下さい。
◎いい年にしたいですね。すべての国に平和を！
◎世界中の赤ちゃんが無事生まれますように。
◎グランドゼロを拝読するたびに命の尊さを感じます。平和を祈る思いです。今年も小さな応援届けたいと思ってい

がんばらないレーベル好評発売中

新発売！

ふるさと

鳥の歌
ジョスランの子守歌
赤とんぼ
ふるさと
浜辺の歌
カルメン幻想曲　他８曲

演奏

ヴラダン・コチ	（チェロ）
ハナ・コチ	（チェロ）
トーマス・コチ	（チェロ）
ルッツィー・コチ	（チェロ）
有吉英奈	（ピアノ）
ヤン・テューリー	（オーボエ）

ひまわり

ひまわり
見上げてごらん夜の星を
早春賦　　他５曲

演奏

坂田明	（サックス・クラリネット）
フェビアン・レザ・パネ	（ピアノ）
吉野弘志	（ベース）
ヤヒロトモヒロ	（パーカッション）

おむすび

おむすび
マイ・ファニー・ヴァレンタイン
星めぐりの歌　　他３曲

演奏

坂田明	（アルトサックス・クラリネット 朗読・ベルズ・バードコール）
黒田京子	（ピアノ・うた）
バカボン鈴木	（ベース）
坂田　学	（ドラムス）

ＣＤは１枚 2500 円（税込）で販売中、ご注文方法は次ページをご覧下さい。
がんばらないレーベルＣＤ、オリジナル鞄の販売収益金は、チェルノブイリとイラクの子ども達の医薬品に使われます。

チェルノブイリの子ども達の笑顔を祈って

一澤信三郎帆布特製ＪＣＦオリジナル鞄にショルダータイプの新製品ができました。地色は深い紺色で、茶色の皮のひも押さえがアクセント！
手提げタイプの在庫はＡ（ブルーグレー）だけになりました。
ご注文をお待ちします！

新発売！

☆ショルダー　Ｄ（地色：紺）
・たて 34 ×よこ（口元 25 ／底 22）
　マチ 6（cm）
・内ポケット付
・口元ボタン付
・定価　10,000 円

☆手提げ鞄　Ａ（地色：ブルーグレー）
・たて 26 ×よこ（口元 36 ／底 30）
　マチ 6（cm）
・定価　4,500 円

◎鞄・ＣＤ購入お申し込み方法

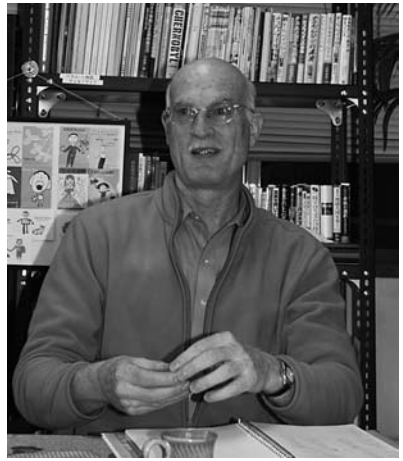
Fax： 0263-46-6229　又は
Email：jcf@jca.apc.org

・お名前
・ご注文品名
・ご注文数
・郵便番号
・ご住所
・連絡電話番号

を明記してお申し込み下さい。
郵便振替用紙を同封してお送りします。
お手許に届きましたら、用紙に記載された代金と送料をご送金下さい。

ＪＣＦ／日本チェルノブイリ連帯基金
〒 390-0303
長野県松本市浅間温泉 2-12-12
Fax.0263-46-6229
E-mail　jcf@jca.apc.org

スマイル!!
オリバー先生の英語教室


オリバー・カーター先生

毎週火曜日の夕方、事務局の空きスペースで、オリバー・カーター先生の英語教室が開かれる。

長身のオリバー先生に頭の上で「ハーイ！」と呼び掛けられると、なぜか一日の仕事疲れもすっ飛んで元気な気持ちになるのが不思議です。

カリフォルニア生まれの先生はアリゾナ州で大学生活を送り、サンフランシスコ、ニューヨークでの生活を経て1983年12月に日本にやってきました。学生時代から料理学、経営学を学んだ先生は、日本でメキシコ料理店を経営したかったのです。縁があって松本市の女鳥羽川沿いにメキシコレストランを開きましたが、レストラン経営は拘束時間が長く、当時は食材を集めるのも大変。副業だった英語教師が本業となり、お店は閉じることに…。88年には四賀村の女性と結婚。寒いのが苦手なオリバー先生が信州に住みつくことになってしまったのは、そんな訳でした。

松本大学やカルチャースクールで英語を教え、料理はもちろん大工仕事や絵、ギターもお得意！　手作りのバーベキュー設備で自慢の料理の腕をふるい、自作のダーツ、ピンポン台でみんなを楽しませる。ビールを飲むのと人を喜ばせるのが大好きなオリバー先生にお年は？　と聞いたら「25歳だよ！」とウィンクが返ってきました！　（布山）

いつも笑いが絶えないオリバー先生の英語教室

私たちの英語教室は現在生徒が5人、年齢・性別・職業・趣味など実に多彩です。

毎回冒頭に、一週間の出来事をそれぞれが英語で発表します。その話題の幅広いこと！　オリバー先生が茶目っ気たっぷりに、実に暖かいコメントをくださいます。そのあとは会話の頻出表現を練習します。会話は慣れと言いますが、適切な文法用語を用いて論理的に説明してくださるのが嬉しいです。

英語圏の人と臆せずにコミュニケーションできるようになる、というのが目標です。

忙しくてもなんとか続けよう、と思える原動力になっているのはオリバー先生の明るさと仲間の存在です。教室で皆と時間を共有すると元気になれるのです。

現在の課題は、居心地がよすぎて目標を忘れてしまいそうになることでしょうか（笑）。　（由井寿美江）

HIROSHIMA 1958

Book

エマニュエル・リヴァ

マルグリット・デュラス脚本、アラン・レネ監督の映画『ヒロシマ・モナムール』（邦題『二十四時間の情事』）の主演女優エマニュエル・リヴァが、1958年にロケで訪れた広島で撮影した写真集。写真に加え、映画製作をめぐるレネからデュラスへの手紙、リヴァへのインタヴュー、港千尋のエッセイほか、資料図版50余枚を収録している。

HIROSHIMA 1958
写真：エマニュエル・リヴァ
編者：港千尋＋マリー＝クリスティーヌ・ドゥ・ナヴァセル
翻訳：関口涼子
発行：インスクリプト
定価：3500円＋税

原発と地震

Book

新潟日報社特別取材班

2007年7月16日、新潟県中越沖地震によって、東京電力柏崎刈羽原発で稼働中の原子炉がすべて緊急停止した。設計時の想定を大幅に上回る激しい揺れに襲われ大きな被害を受け、「安全神話」が崩壊した。世界最大の原発集中地で起きた非常事態を検証し、地震国日本での原発のありかたを考える。

原発と地震
―柏崎刈羽「震度7」の警告
著者：新潟日報社特別取材班
発行：講談社
定価：1500円＋税

聖母像の到来

Book

若桑みどり

16世紀、キリスト教宣教師とともに到来した聖母マリア像を、日本の民衆はいかに受容し創作し変容させたのか。「世界美術史」の立場から聖母像への認識の変更を迫る、美術史の第一人者が書き遺した、図像研究の輝かしい達成。聖母マリアのイコノロジー（本書帯より）

聖母像の到来
著者：若桑みどり
発行：青土社
定価：3400円＋税

チェチェンへ　アレクサンドラの旅

Movie

監督：アレクサンドル・ソクーロフ

世界的チェリスト、故ロストロポーヴィチ夫人で歌手のガリーナ・ヴィシネフスカヤが演ずる80歳のアレクサンドラが、チェチェンのロシア軍駐屯地にいる孫のデニスに会いに行く。彼女は近くの市場へでかけチェチェン人女性と親しくなる…。報道統制下にあるチェチェンの最前線でオールロケを敢行した、ソクーロフ監督の最新作。

映画『チェチェンへ　アレクサンドラの旅』
監督：アレクサンドル・ソクーロフ
配給：パンドラ＋太秦
2007年／ロシア・フランス／92分／35mm／カラー

チェチェン民族学序説

Book

ムサー・アフマードフ

長年にわたるロシアの侵略に対して抵抗を続けている少数民族のチェチェン人。小さなチェチェンがなぜ大国ロシアに抵抗できるのか、なぜ滅びなかったのか。本書は、チェチェン民族の道徳であり、哲学であり、行動規範でもあるチェチェン精神の源「ウェズデンゲル」について著した世界最初の一般書である。

チェチェン民族学序説
著者：ムサー・アフマードフ
訳者：今西昌幸
特別寄稿：林 克明
編・挿画：大富 亮
発行：高文研
定価：2500円＋税

タルコフスキイの映画術

Book

アンドレイ・タルコフスキイ

本書は、〈映像詩人〉アンドレイ・タルコフスキイが「ソ連邦映画委員会付属脚本家・監督二年制高等クラス」で講義した内容と4本の論文、1本のインタビュー記事を加えた講義録テキスト。「映画―これは偉大で高度な芸術である。私が映画をどのように評価しているのか、と尋ねられるなら、私はそれを音楽と詩のあいだに置く」（タルコフスキイ）

タルコフスキイの映画術
著者：アンドレイ・タルコフスキイ
訳者：扇 千恵
発行：水声社
定価：2500円＋税

夕べ

アンナ・アフマートワ

Book

本書は、ロシアの詩人、アンナ・アフマートワ（１８９９～１９６６）の叙情的な処女詩集『夕べ』（１９１２）の短歌訳詩集。一連四行のスタンザを五七五七七の短歌一首に、一篇が六連なら六首の短歌訳で構成するという、ユニークな訳詩集。訳者による「解説・対話　アンナ・アフマートワ紀行」ほかの解説も充実している。

夕べ（ヴェーチェル）
著者：アンナ・アフマートワ
短歌訳・解説：工藤正廣
発行：未知谷
定価：2400 円＋税

幼年時代

レフ・トルストイ

Book

『幼年時代』は文豪・トルストイ（１８２８～１９１０）の処女作で、自叙伝的小説。「トルストイへの愛を貫いた」北御門二郎（１９１３～２００４）が、１９７９年に翻訳して未発表のままだった原稿が初めて書籍化された。トルストイ／北御門二郎訳の三部作『幼年時代』『少年時代』『青年時代』が同時刊行。

幼年時代
著者：レフ・トルストイ
訳者：北御門二郎
装画：山本容子
発行：講談社
定価：1200 円＋税

ロシア文学の食卓

沼野恭子

Book

ロシア文学の中で食事の様子はどのように描かれ、どのような意味を伝えようとしているのか。食卓に現れる料理の数々は、ロシアの多様な地域性、宗教、時代背景や思想をうつしだす。ロシアの作家の作品から印象的な食卓の場面を取り出し、ロシア文学を「食」という観点から読みなおす。

ロシア文学の食卓
著者：沼野恭子
発行：日本放送出版協会
定価：1160 円＋税

風の馬

ポール・ワーグナー

Movie

『風の馬』は１９９８年、チベットのラサやネパールで、監視の目をかいくぐり撮影された劇映画。この映画は、実話をもとにチベット問題を真正面から描いた衝撃作として、世界各地で上映され、芸術的な賞賛と政治的な論争を呼んだ。今年４月から渋谷アップリンクほか、全国順次ロードショー公開される。

映画『風の馬』
監督：ポール・ワーグナー
配給：アップリンク
1998 年／アメリカ／ 97 分／ video ／カラー

雪の下の炎

パルデン・ギャツォ

Book

僧侶である著者は、１９５９年のチベット民衆蜂起後、28 歳で中国当局に捕えられ、以後33年間政治犯として獄中生活を送り、１９９２年に釈放後インドに亡命した。その後自らの体験とチベットの現状を知らせようと、世界各地をまわり活動を続けている。２００８年、著者を描いたドキュメンタリー映画『雪の下の炎』（監督：楽真琴）が制作された。

雪の下の炎
著者：パルデン・ギャツォ
序文：ダライ・ラマ
訳者：檜垣嗣子
発行：ブッキング
定価：2500 円＋税

鳥の仏教

中沢新一

Book

この本の中には、仏教思想のエッセンスがほぼ満遍なく網羅されており、しかもその思想を鳥たちがやさしく語り出してみせています。『鳥の仏教』は小さなかわいらしい本ですが、人類にとってはまるで「すばらしい花環」のように貴重な、精神文化の遺産です。（「まえがき」より）

鳥の仏教
著者：中沢新一
装画・挿画：木部一樹
発行：新潮社
定価：1400 円＋税

Information

日本チェルノブイリ連帯基金（ＪＣＦ）活動紹介

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）は 1991 年 1 月に設立されました。1986 年 4 月 26 日に起きたチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故の放射能被災地へ、主に医療を中心として支援活動を展開しています。

支援開始当初のベラルーシは、深刻な経済状況で、白血病など病気の子ども達は、十分に治療を受けることができませんでした。衛生管理もできなかったために、多くの子ども達は感染症などで亡くなっていました。JCF は、現地の医師らと話し合いながらプロジェクトを組み、信州大学などの医療従事者と共に着実な支援活動を続けてきました。

そして 2004 年、活動の支援先はイラクへも広げられました。イラクでは湾岸戦争以後に白血病が急増しています。長期にわたった経済制裁後、新たに起きた戦争で極端に物資が不足、子ども達の治療もままならず、多くのいのちが失われています。

日本イラク医療支援ネットワーク（ＪＩＭ―ＮＥＴ）

イラクにおける小児がん（おもに白血病）医療支援のためのネットワーク。医療支援を行っている NGO や関心のある医師たちが、専門性を持ち、過不足のない支援を（イラクの人々が自分たちできちんとした治療ができるようになるまで）継続的に続けることを目指して立ち上げたネットワーク。JCF も構成団体の一員。

website　http://www.jim-net.net/

◆ＪＣＦ会費振込口座

正会員年会費（1口）	１０，０００円
賛助会員年会費（1口）	３，０００円
郵便振替口座番号	００５６０－５－４３０２０
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金

◆ＪＣＦ／イラク支援振込口座

血液成分分析機購入、医師招聘研修、薬品購入

郵便振替口座番号	００５２０－０－８１０７８
加入者名	ＪＣＦ／イラク支援

グランドゼロ GROUND ZERO JCF

第 79 号

発行日　2009 年 3 月 26 日
発行人　鎌田 實
発行所
日本チェルノブイリ連帯基金
イラスト題字　貝原 浩
イラスト　榧野ひかり
小林裕子
スタッフ　神谷さだ子
布山みな子
森　たかの
協力　寺島仁美
ＪＩＭ―ＮＥＴ
風樹光
印刷　電算印刷

■編集後記

Dr. リカがアパートに入居して半月も経たないのに近所の一戸建てに引っ越すという。家賃が安くて敷金礼金が不要というのが大きな要因らしい。引っ越す家は古くて、松本の冬の暖房費、備品や安全を考えると決して割安とは思えないのだが。油の国から来た Dr. リカには日本の暖房費はピンと来ないし、敷金礼金は不動産屋への『賄賂』と見えて承伏できないらしい（払ってしまったのに）。こんな時、異文化圏の者が解り合う難しさを実感する。「結婚だって異 文化共生」と言った人がいるが、異文化を受容するのには相手への敬愛と時間が必要らしい。　（布山）

販売物紹介

Book

・「チェルノブイリからの伝言」
ＪＣＦ 編（オフィスエム）1200 円

・ユーラシア・ブックレット No.21
「ベラルーシ 大地にかかる虹
～日本チェルノブイリ連帯基金の 10 年」
神谷さだ子 著（東洋書店）600 円＋税

CD

・「小室等／ベラルーシの少女」
（8cm シングル盤）1000 円

◆がんばらないレーベルＣＤ

・「ヴラダン・コチ／ふるさと」
2500 円

・「坂田明／ひまわり」
2500 円

・「坂田明／おむすび」
2500 円

一澤信三郎帆布オリジナル鞄

☆綿帆布製手提げ鞄 A
（26 ×口元 36・底 30 × 6）　定価　4,500 円

☆綿帆布ショルダーＤ
（34 ×口元 25・底 22 × 6）　定価　10,000 円
内ポケット、口元ボタン付

●特定非営利活動法人
日本チェルノブイリ連帯基金（ＪＣＦ）
〒 390-0303
長野県松本市浅間温泉 2-12-12
TEL 0263-46-4218　FAX 0263-46-6229
E-mail　jcf@jca.apc.org
Website　http://www.jca.apc.org/jcf/